

日本絵本史における光吉夏弥の果たした役割

—海外絵本の翻訳から評論へ—

甲南女子大学大学院 人文科学総合研究科 博士後期課程
心理・教育学専攻（人間教育学コース）

学籍番号 4609001

氏名 生駒幸子



目次

目次	i
はじめに	1
第1章 光吉夏弥の人物像と年譜・業績	8
1. 光吉業績の時代区分	8
2. 人物像と年譜	11
3. 業績一覧	16
第2章 第I期前期——戦中 児童文化統制期（1942～1945年）	38
1. 翻訳 『花と牛』（1942）『フタゴノ象ノ子』（1942）	38
2. 評論	51
(1) 「翻訳者の反省」『少国民文化』（1943.1）	
(2) 「絵本の世界」『生活美術』（1943.9）	
3. 第I期前期のまとめ	62
(1) 海外絵本の翻訳の試み——〈岩波の子どもの本〉前史	
(2) 児童文化統制と光吉夏弥	
第3章 第I期後期——戦後 占領期（1945～1952年）	76
1. 翻訳	76
(1) 『たくさんのお月さま』（1949）	
(2) 『エブラハム・リンカーン』（1950）	
2. 評論	93
(1) 「最近のアメリカの児童図書—1941～1949」『新児童文化』（1950.9）	
(2) 「児童文学」『児童百科事典10』（1952.12）	
3. 第I期後期のまとめ——占領期における翻訳絵本の出版	99

第4章 第Ⅱ期——〈岩波の子どもの本〉の時代（1953～1968年）	109
1. 翻訳	109
(1) 岩波書店〈岩波の子どもの本〉1—『ちびくろ・さんぼ』（1953）	
(2) 岩波書店〈岩波の子どもの本〉2—『ひとまねこざる』シリーズ（1954-68）	
(3) 岩波書店〈岩波の子どもの本〉3—『はなのすきなうし』（1954）	
2. 評論	149
(1) 「英米の児童文学賞」『読書指導講座第9巻』（1955）	
(2) 「子どもの本の世界」『週刊読書人』（1968.3-68.4）	
3. 第Ⅱ期のまとめ——新しい絵本観の誕生	155
第5章 第Ⅲ期——絵本評論の本格化（1969～1990年）	178
1. 翻訳	178
(1) 『ガンピーさんのふなあそび』（1976）	
(2) 『大きいツリー小さいツリー』（1977）	
(3) 『ひとまねこざる』シリーズ6冊の大型絵本化（1983-84）	
2. 評論	198
(1) 「子どもの本の世界から」『子どもの館』（1974.7-80.7）	
(2) 「絵本の世界」『月刊絵本』（1974.9-77.5）	
(3) 「絵本の世界から」『絵本のたのしみ』（1984.4-85.3）	
3. 第Ⅲ期のまとめ	219
(1) 絵本翻訳の変遷——“右開き縦組み”への組み直しから、“原書主義”へ	
(2) 絵本研究への挑戦——文献調査にもとづく絵本評論	
おわりに——日本絵本史における光吉夏弥の果たした役割	227
引用・参照文献	233
初出一覧	239

はじめに

現在、絵本は「絵と言葉で成り立つひとつの物語の世界」という共通理解を得て、子どもだけではなく世代を超えてひろく親しまれている。絵本について書かれた入門・啓蒙書、理論・研究書、保育や教育実践の現場での報告書なども、おびただしい数にのぼる。教材として、芸術としてなど、見方はさまざまであるが、絵本は、現代日本において漫画やアニメーションと並ぶ、今や市民権を獲得したひとつの文化、ひとつの芸術であることはまぎれもない事実であろう。

日本において絵本の表現、印刷技術においても絵本が大きな文化的発展を遂げたのは、戦後の岩波書店によって発刊された〈岩波の子どもの本〉が起源だといわれている。では、どのような意味において、〈岩波の子どもの本〉は新しい時代を象徴する絵本群だったのだろうか。本研究では、〈岩波の子どもの本〉の制作にかかわった光吉夏弥という人物に光を当て、その業績をたどりながら、戦中から戦後へと展開する日本絵本の歴史を紐解いてみたい。

1. 研究の目的

本研究の目的は、戦中・戦後に児童書の翻訳者として活躍した光吉夏弥（みつよし・なつや 1904～1989年）の児童書に関わる全業績（翻訳、評論）を調査し、そのうち絵本にかかわる業績を検討することにより、光吉が日本絵本史において果たした役割を明らかにすることである。

光吉は、戦後の絵本の出発点となった〈岩波の子どもの本〉絵本シリーズ（以下〈子どもの本〉と略記）を石井桃子らと共に編集・翻訳した人物である。〈子どもの本〉シリーズは多くの海外絵本を含んでいた。これらの海外絵本は翻訳されて、日本に新たな絵本観をもたらした点で絵本史上、高く評価されている。この〈子どもの本〉シリーズで翻訳された海外絵本のほとんどが、実は光吉の蔵書から原書提供されたものだったという。

光吉は戦前から海外絵本や関係文献を蒐集しており、洋書コレクターとしてもよく知られていた。戦前から新聞記者、舞踊・写真の評論家という多彩な顔を持つ人物であったが、戦中・戦後は児童書の編集・翻訳に尽力した。おもな翻訳絵本に、『ちびくろ・さんぼ』、『ひとまねこざる』など長年読み継がれる作品がある。

〈子どもの本〉に代表される光吉の戦後の業績はよく知られ、絵本史においても種々の評価がなされている。しかし、戦中の業績はこれまであまり取り上げられることがなかった。筆者は光吉の戦中の業績のなかに、戦後に華々しく開花した日本の絵本文化につながる手がかりがあるのではないかと推測する。つまり、光吉は戦中から戦後へと続く児童書出版を解き明かす数少ないキーパーソンの一人なのではないか。

けれども光吉の経歴・人物像及び業績に関する手がかりは極端に少なく、謎に包まれている。そこで本研究では、戦後絵本史の出発点を探るべく、光吉の児童書に関わる全業績（翻訳・評論）を調査したうえで、このうち特に絵本にかかわる業績に焦点を絞り、日本絵本史において光吉業績の果たした役割を明らかにする。

2. 研究の方法

次に本研究の研究方法について述べる。絵本の歴史研究という性質上、本研究の方法は文献調査とする。光吉が編集、翻訳、執筆を手掛けた書籍、雑誌記事、評論、エッセイなどを第一次文献として取り扱う。光吉の業績の評価、業績の裏付けとなる資料等を第二次文献とした。なお、絵本史に関する先行研究は少ないため、児童文化・児童文学研究の先行研究も参照した。

研究の手順としては、時代区分によって業績を分類し、各期の業績を検討した。その際、光吉業績を考察するにあたり独自の時代区分を設けている。これは、〈岩波の子どもの本〉出版を分水嶺とする以下4つの時代区分である。光吉業績を考察する際の時代区分の妥当性については、第1章1において説明する。各期の業績を大きく翻訳と評論に分類し、それぞれの時代区分に代表的な業績の特徴と絵本史上の役割を考察する。各期における業績の特徴から、光吉業績の全体像をとらえることが可能になる。以上の手順により、日本絵本史において光吉業績がいかなる役割を果たしたのか検討する。

《時代区分》

第Ⅰ期前期	：1942～1945年	〈岩波の子どもの本〉出版以前	一戦中	児童文化統制期
第Ⅰ期後期	：1945～1952年	〈岩波の子どもの本〉出版以前	一戦後	占領期
第Ⅱ期	：1953～1968年	〈岩波の子どもの本〉出版時代		
第Ⅲ期	：1969～1990年	〈岩波の子どもの本〉出版以降、最終業績まで		

3. 本研究における術語の整理

本研究は児童文化領域の術語を採用するが、手続き上、説明が必要だと思われる術語の定義を述べておく。

- ①「児童書」とは、児童文学、絵本、紙芝居、おはなしなど、児童向けに出版された本の総称とする。
- ②「絵本」とは、絵（写真も含む）と詞（ことば）で構成される書籍体の出版物（紙芝居・コミックは含まない）とする。なお、絵本の絵は挿絵的なものではなく、言葉・文章テキストと補完的に働いて物語を構成するものである。
- ③「絵本の翻訳」は、選書と編集をも作業を含むものとする。戦前から戦後間もない時期は、絵本を翻訳する際、本を作り上げていく細かな作業は未分化であり、翻訳者にすべて委ねられていることが多かった。

翻訳絵本における選書とは、重要な前置きとなる作業である。つまり選書とは、「何を翻訳するのか」ということである。そして翻訳とは「どのように翻訳するのか」ということである。翻訳には純粋に文章のみを翻訳することの上に、さらに造本、デザインやページのレイアウトを整えたりする作業も含まれていた。海外絵本の翻訳をおこなうとき、翻訳とは純粋に絵本の文章を翻訳する作業のうえに、選書から編集までが含まれていたことになる。

分かり易く説明すると、例えば〈岩波の子どもの本〉の海外絵本の翻訳での作業が挙げられる。選書とは、数ある海外絵本のなかから、翻訳に適した一冊を選ぶことである。翻訳のなかの編集とは、“左開き横組み”である海外絵本の原書を、“右開き縦組み”に組み直すことであり、物語の進行方向が逆方向になるために絵を逆版にしたり、絵を分解して再構成したり、絵を描き加えてレタッチする等の作業も含まれていた。

④「翻訳」「抄訳」「翻案」は厳密には意味が異なるが、ここでは「翻訳」全般として取り扱う。「抄訳」とは原文の一部を抜き出して翻訳することであり、「翻案」とは、前人の行なった事柄の大筋を真似て細かい点を変えて作り直すこと、特に小説・戯曲などについていう（『広辞苑第6版』 岩波書店 2008年）と、それぞれ定義されている。

児童書の翻訳においては、原書が完訳され始めたのは戦後のことである。とくに戦後の著作権概念の確立期までの翻訳に関しては、何を原書としたのかも不明であったりする。「翻訳」「抄訳」「翻案」と特定の翻訳方法をできないことも多い。このため本研究では、「翻訳」を「抄訳」「翻案」を含めてと大きくひとくくりにして取り扱う。

4. 先行研究

光吉の業績、人物像などに関する文献は極端に少ないのが現状であるが、敢えて先行研究として挙げられるものは、以下のとおりである。先行研究を年代順に列挙し、説明を加える。

主要先行研究一覧

1. 瀬田貞二「英米児童文学を日本はどうとりいれたか 4. 昭和前期」瀬田貞二・猪熊葉子・神宮輝夫編『英米児童文学史』研究社出版 1971年 (pp. 34-45)
2. 永田桂子「四、玩具論から絵本論が分かれる(二)絵本論が沸きたつ」(pp. 118-154) / 「五、[現代]玩具論、絵本論が反映 (二)絵本論が氾濫」(pp. 180-210) 『絵本観・玩具観の変遷』高文堂出版社 1987年
3. 犬飼和雄「光吉夏弥」日本児童文学学会編『児童文学事典』東京書籍 1988年 (p. 727)
4. 定松正「光吉夏弥」大阪国際児童文学館編『日本児童文学大事典 第二巻』大日本図書 1993年 (pp. 184-185)
5. 三宅興子「第5章「こどものとも」にみる外国絵本の影響：第1節 外国絵本の受容」『日本における子ども絵本成立史—「こどものとも」がはたした役割』ミネルヴァ書房 1997年 (pp. 224-235)

6. 川勝泰介「X 絵本研究試論 二、絵本研究史考：三 「絵本の世界」における光吉夏弥の絵本観、四 絵本研究しにおける一仮説」『児童文化学研究序説』千手閣 1999年 (pp. 209-216)
7. 石川晴子「第15章 翻訳絵本の十五年間—西から東から」鳥越信編『はじめて学ぶ 日本の絵本史Ⅱ』ミネルヴァ書房 2002年 (pp. 272-288)
8. 藤本朝巳「第18章 絵本研究」鳥越信編『はじめて学ぶ 日本の絵本史Ⅲ』ミネルヴァ書房 2002年 (pp. 353-366)
9. 石川晴子「第2章 占領下の翻訳絵本—アメリカからの新しい絵本の波」鳥越信編『はじめて学ぶ 日本の絵本史Ⅲ』ミネルヴァ書房 2002年 (pp. 36-57)
10. 近藤昭子「第4章 〈岩波の子どもの本〉の新しさと時代による限界」鳥越信編『はじめて学ぶ 日本の絵本史3』ミネルヴァ書房 2002年 (pp. 81-106)

以上の先行研究のうち、3及び4は事典の事項であり、6以外の文献は、全て絵本史の一部分を論じるなかで、光吉の業績に数行に及ぶ記述がある程度のものである。そのほとんどが光吉の〈岩波の子どもの本〉での編集・翻訳に言及したものである。しかし、どの文献においても、論者は光吉の働きを戦後の絵本史に新たな潮流をもたらしたとして評価している。ただし、光吉のどの業績にどのような特徴があり、それが絵本史でどのように評価できるのかという具体的な検討を行っている論考は皆無である。

唯一、6に挙げた川勝泰介による先行研究は、他の論考の様相とは大きく異なり、光吉の戦中の業績とその絵本史での位置づけに言及する。筆者がもっとも注目に値すると思うのは、川勝による論考である。以下に、本研究への手がかりとなった川勝文献の特色を述べる。

先行研究6『児童文化学研究序説』¹⁾において、川勝は次のように仮説を述べている。

三 「絵本の世界」における光吉夏弥の絵本観

『生活美術』にみられる評論のなかでも最も注目されるべきものは、「絵本の世界」と題した光吉夏弥によるものである。

評論家で、多数の外国の絵本の翻訳家としても知られる光吉夏弥の外国の絵本についての見識の広さは、雑誌『子どもの館』（福音館書店）に掲載されていたその資料の豊富さからも容易に推測されるが、『生活美術』に見られる「絵本の世界」はこの時期の絵本研究の評論としては群を抜くものである。（中略）昭和二八年に出版された『岩波の子どもの本』シリーズは、鳥越信によって「絵本のあたらしい方法、特に、白のつかいかたについてのだいたんな方法を具体的におしえてくれた」として高く評価されているものである。これは、このシリーズによって、これまでの『講談社の絵本』に代表される日本の伝統的な「ベッタリ絵本」の絵本観がようやくにして打ち破られたことを意味しているのであるが、光吉は「印刷面で日本に

とぼしいのは、二色絵本と黒色一色の絵本である」ことを指摘し、この未開拓な境地の開発を説くとともに、これまでの「ベツタリ絵本」のように画面全体を色で塗りつぶさなければ絵本にならないという傾向をおかしなことだとして、暗に鳥越が言うところの「白のつかいかた」の問題にも示唆を与えた。

この他にも、この評論の中にはこれまでの絵本論には見られなかったような新しい見解を見ることができる。(中略)

四 絵本研究史における一仮説

「絵本の世界」において展開された光吉夏弥の絵本観は、あくまでも彼が収集した世界の絵本を通して確立されたものであったが、具体的な絵本の事例を紹介しながらこのように絵本の本質までに言及した絵本論は、この時期のものとしては他に例をみないものであったし、またその内容においてもまったく新鮮なものであった。
(中略)

以上、雑誌『生活美術』における光吉夏弥の絵本論を中心に見てきたわけであるが、昭和一八年という政局の不安定な時代に光吉が多く外国の絵本を紹介しつつ、それらを通してよくもこれだけ自由に絵本について論じることができたものだと驚かされるとともに、さらにそれ以上に、彼の絵本に対する卓越したとらえ方に驚かざるを得ない。

昭和二八年一二月に刊行された『岩波の子どもの本』シリーズは、先に述べたように、一般にこれまでの日本の絵本観を打ち破るのに大きく貢献したと言われている。光吉は、このシリーズの企画に参加した人のひとりであり、その刊行に際して大きく関与したにちがいない。(中略)

このような点から考えるとき、戦前の絵本観を打ち破り、戦後の新しい絵本観が形成されていく過程において、光吉夏弥の果たした役割の大きさを見逃すことはできないであろう。このことは、極端に言うならば、今日の日本における絵本観は光吉夏弥の絵本観と彼の絵本に関する業績の上に成立したものではないのかという一つの仮説を導くことになる。(上記文中の中略及び下線は、筆者による)

この仮説は、今までは指摘されることがなかった日本絵本史における光吉夏弥の役割を論じている点で、大変興味深いものである。ただし川勝は仮説の根拠として、『生活美術』に掲載された光吉の評論「絵本の世界」しか挙げてはおらず、光吉の絵本論の独自性について具体的に言及しているわけではない。

先行研究に加え、本研究の大きなヒントになったのは、鳥越信による絵本史の時代区分に関する問題提起である。この問題提起は、筆者が戦中・戦後の絵本史研究において光吉夏弥に着目する契機を与えたといえる。以下に鳥越の文章を引用し²、本研究に与えた影響を述べる。

日本近代絵本史の時代区分

さて、では日本近代絵本史を構築していくさいの大前提である時代区分をどのようにとらえるか。(中略) 絵本の場合は、やはり起点の問題をはじめ未解明の部分がたくさんあるが、先に見てきた論調から、一九五三年が時代区分の大きな節目と

して定着する可能性はきわめて高い。（中略）

そこで、一九五三年説が定着するかどうかはのちの史家にまかせるとして、私としては二つの問題提起をしておきたい。

一つは〈岩波の子どもの本〉シリーズと、一九四二年に企画刊行され、二冊で中断した筑摩書房の〈世界の傑作絵本〉シリーズとの関係である。（中略）結論的にいえば筑摩のシリーズは、岩波のシリーズの前史に相当するといつてよい。岩波の当事者のひとり光吉夏弥の証言として、最も多く引用されるのは、月刊「絵本」の一九七三年五・六月号に掲載された「岩波の子どもの本—その発刊のころのことども」であるが、なぜか光吉自身が当事者であった筑摩のシリーズについては、ひとつこともふれられていない。今となっては直接の証言を聞く機会はなくなったが、どう考えてもこの両者はつながっており、無関係ととる人はまずいないだろう。とすると、岩波のシリーズから新しい絵本の歴史がはじまったとする説は、一九五三年からではなく一九四二年からとなるのではないだろうか。この問題については、過去に論じられたことは全くなかったと思うが、今後検討すべき大きなテーマだと考えられるので、ぜひいろいろな角度から煮つめていってほしい。

二つめは、歴史的・相対的評価と今日的・絶対的評価との落差についてである。問題をわかりやすく考えるために、未明伝統克服の時期に生まれた児童文学作品と対比してみよう。

この時期に生まれ、今日もなお読みつがれている児童文学作品は、作者によってはその間に推敲や手直しがあったにしても、基本的には発表当時のものがそのまま残っている。つまり、歴史的な評価と今日的評価が完全に一致しているわけで、だからこそ今や古典的作品として定着している。

それに対して、〈岩波の子どもの本〉シリーズの場合は、初版の内容と形がそのまま今日まで残っている作品もある反面、全くかわってしまったものも多い。たとえば『ちいさいおうち』や『ひとまねこざる』などがそうである。

『ちいさいおうち』は最初、右開き・たて組み・逆版の小型本で出版され、その後、それを版型は同じのまま、左開き・横組み・正版のものにかえ、さらに原書のサイズと同じ大型の左開き・横組み・正版の絵本となった。『ひとまねこざる』も同様で、最初の右開き・たて組み・逆版の小型本から、現在では左開き・横組み・正版の大型本（原書と同サイズ）へとかわっている。

ということは、原書のレイアウトをこわさずに翻訳するのが当然の理で、それに反したものは否定的評価の対象になっている、という意味になる。つまり、このシリーズの中には、今日的評価としては全面的に否定されるべき作品がかなり含まれているわけで、その点が先の未明伝統克服の時期の児童文学作品との決定的な違いとなっている。

もちろん絵本の場合、絵本に対する社会的認知度の未成熟など、相対的に見ていくことが正しい歴史的処理であることはいままでもないが、この数年間、日本の近代絵本の歴史に取り組んできた立場から考えると、一九五三年を未明伝統克服の時期ほど、決定的な時代区分の節目だ、と簡単にいいきれぬかについては大きなためらいが残る。

（上記文中の中略及び下線は、筆者による）

上記の鳥越の一つ目の問題提起、戦中の筑摩書房〈世界傑作絵本〉二冊の翻訳絵本と、岩波書店〈岩波の子どもの本〉の関係性についての言及は、本研究に大きな手がかりを与えた。二つのシリーズに共通する翻訳絵本を取り上げて、翻訳がどのように行われているかを比較考察するという翻訳絵本の方法を検討することを思いついた。この方法により、〈岩波の子どもの本〉に日本絵本史の区分を変えるどのような新しさを持っていたのかを明らかにすることができる。

鳥越の二つ目の問題提起にもヒントを与えられた。戦中の筑摩書房〈世界傑作絵本〉の2冊の翻訳絵本と、岩波書店〈岩波の子どもの本〉の関係性を見極め、戦後の絵本翻訳でどのような変遷を遂げていくのかを、数冊の絵本を比較考察することによって解き明かすことができた。

これまで述べてきたように、本研究の着眼点については、川勝と鳥越による先行研究から重要な手がかりを得ている。

5. 論文構成

次に論文構成についてであるが、まず本研究の研究目的、方法、先行研究、論文構成について述べる。

第1章では、業績の時代区分、そして調査から明らかになった光吉の人物像、年譜、全業績を明らかにする。第2章では戦中、第3章では戦後占領政策期、第4章では戦後の〈岩波の子どもの本〉時代、第5章では〈岩波の子どもの本〉以降の業績を明らかにする。各章では翻訳、評論のうち主要な業績を取り上げ、各期の光吉業績の特徴を明らかにする。さらに各章のさいごでは、各時期の日本絵本史の背景を明らかにしたうえで、光吉が果たした役割に言及する。

おわりに本研究の結論として、日本絵本史のなかで光吉が果たした役割についてまとめることとする。

光吉の蒐集した書籍と文献“光吉コレクション”は、没後、未亡人の意志により1999年に白百合女子大学児童文化研究センターに寄贈され、2006年に「光吉文庫」として公開された。筆者は、これまで掘り起こされることのなかった光吉文庫の資料調査をもとに、数年来研究をつづけている。2011年4月から光吉文庫の資料調査及び整備に対して、文部科学省所轄独立行政法人日本学術振興会より、平成23年度科学研究費補助金（基礎研究C）の交付が決まり、未整備資料（書簡・手書きの目録・原稿、新聞・雑誌記事など）の調査・整備がはじまっている。

本研究の成果によって、より一層、「光吉文庫」の資料価値がひろく理解され、さまざまな視点からの資料利用と学術研究が進むことを願う。本研究が、戦中・戦後の絵本史解明の礎石の一つとなれば幸いである。

¹ 川勝泰介「三 「絵本の世界」における光吉夏弥の絵本観」、「四 絵本研究史における一仮説」『児童文化学研究序説』千手閣 1999 (pp. 209-216)

² 鳥越信「序章 仙花紙絵本の時代——一九四五年～五〇年」『はじめて学ぶ日本の絵本史Ⅲ』鳥越信編 ミネルヴァ書房 2002 (pp. 11-13)

第1章 光吉夏弥の人物像と年譜・業績

1. 光吉業績の時代区分

本研究の研究方法で先述したとおり、光吉の業績を考察する際の時代区分として4期を設けている。この時代区分の大きな分水嶺としたのは、1953年に発刊された岩波書店の絵本シリーズ〈岩波の子どもの本〉の出版である。〈岩波の子どもの本〉を分水嶺とする根拠は、以下の2点である。

1点目は、光吉の業績のうち一般的に最も代表的とされる業績が、この〈岩波の子どもの本〉出版における編集・翻訳ということである。2点目は、日本の絵本史において〈岩波の子どもの本〉出版が、絵本史上のエポックのひとつというべき現象であることに拠る。戦後まもなく発刊された〈岩波の子どもの本〉で示された絵本観は、その後の絵本出版のあり方に新たな潮流をもたらした。戦後の日本絵本史を概観するうえでも、〈岩波の子どもの本〉は重要な現象なのである。本研究では、絵本史という時代の流れのなかで光吉業績を考察することを目的としているため、この〈岩波の子どもの本〉を時代区分の分水嶺にすることとした。以下、本研究における各期の時代区分の妥当性を説明する。

《時代区分》

第Ⅰ期前期：1942～1945年8月 〈岩波の子どもの本〉出版以前—戦中 児童文化統制期

第Ⅰ期後期：1945年9月～1952年 〈岩波の子どもの本〉出版以前—戦後 占領期

第Ⅱ期：1953～1968年 〈岩波の子どもの本〉出版時代

第Ⅲ期：1969～1990年 〈岩波の子どもの本〉出版以降、最終業績まで

光吉業績を考察する時代区分のうち、第Ⅰ期は日中戦争を含む第二次世界大戦に日本が参戦した時期である。光吉の児童書にかかわる仕事が始まるのが第Ⅰ期である。この第二次世界大戦は日本の敗戦によって終結するが、戦中と戦後では社会制度からイデオロギーに至るまで、すべての社会現象に異なる様相がみられる。そのため児童書出版を検討する本研究においても、戦中と戦後を分けて整理することとした。これによって、第Ⅰ期は1945年8月の終戦を境界にして、前期と後期の2つに分割している。そのため、第Ⅰ期前期の終点と、第Ⅰ期後期の始点は、同じ1945年と表記する。

第Ⅰ期前期は戦中の1942年から敗戦1945年（8月）までとする。1941年12月の真珠湾奇襲攻撃を契機に太平洋戦争が勃発、日本とアメリカとの交戦が始まった。その後、戦火は次第に激しさを増し、国内の文化統制がおこなわれた。本研究で第Ⅰ期前期とする時代は、第二次世界大戦の終盤にあたる時期である。

1940年前後は光吉が海外児童書を蒐集し始めた時期であり、この頃から児童書出版にかかわるようになったと推測される。光吉がそれまで評論家として活躍していた舞踊、写真分野から、児童書へと視野が広がっていく時期である。そして戦中、光吉は日本少国民文化協会文学部会の一員として、児童文化統制を行う立場にあった。そこで第Ⅰ期前期は、児童文化統制と光吉の業績の関連性を明らかにしつつ、戦中の絵本出版に言及する。

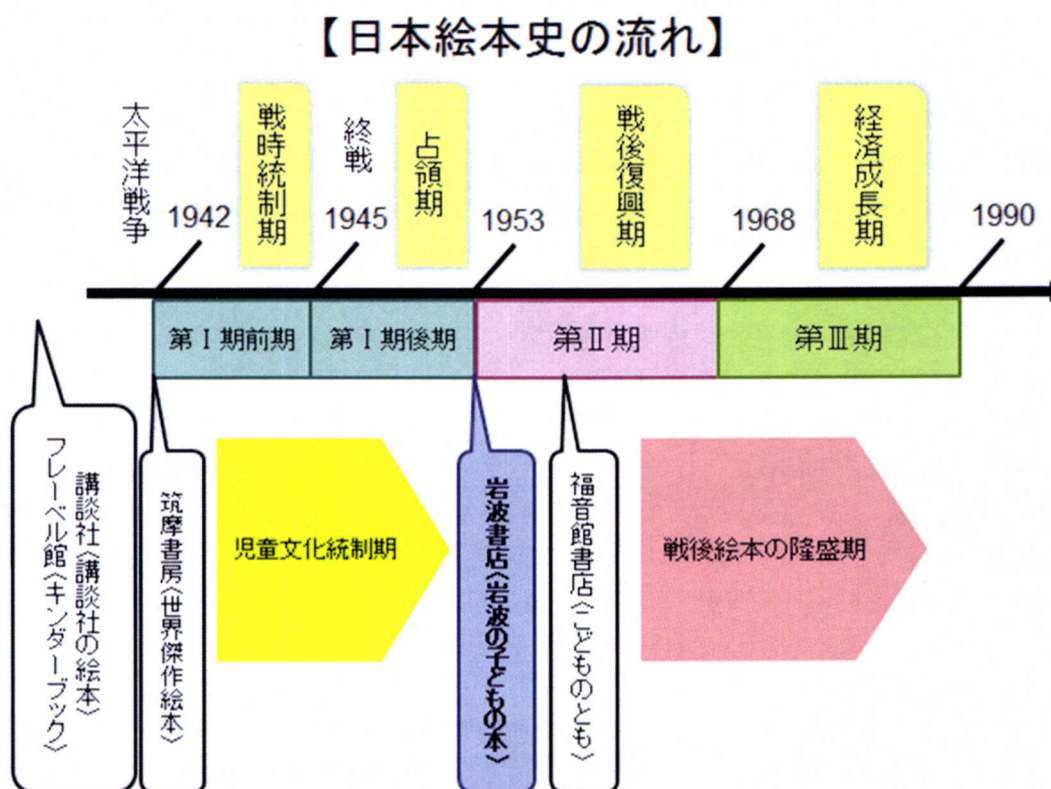
第Ⅰ期後期は、敗戦の1945年(9月)から〈岩波の子どもの本〉出版直前の1942年までとする。日本の社会制度、経済、文化など全てがそうであったように、敗戦を機に、既存の概念が根幹から揺るいだ激動の時代であった。焼け野原から民衆が立ち上がり、その後、日本の各分野で飛躍的な発展を遂げるこの時期は、児童文化・児童書出版もダイナミックに動いた時期である。日本の絵本史においても、この第Ⅰ期後期には、新たな時代を迎える胎動が感じられる現象が数多くある。日本の戦後絵本文化が一気に花開く予兆を、この時期の光吉の活動にもとらえることができる。〈岩波の子どもの本〉出版直前の絵本出版の背景と、光吉業績の関係を明らかにする。

第Ⅱ期は〈岩波の子どもの本〉が発刊された1953年をはじめりとして、光吉が岩波書店の絵本シリーズ編集・翻訳において編集を終える1968年までとする。本研究で扱う〈岩波の子どもの本〉とは、1953年12月から1954年12月の4回配本で出版された24冊の絵本を指す。それら4回の配本内訳は、第1回目の配本は1953年12月、第2回目は1954年4月、第3回目は1954年9月、第4回目は1954年12月にそれぞれ絵本を6冊ずつ出版したものである。本研究においては、〈岩波の子どもの本〉の第1回目から第4回目の配本を第1期出版とする。光吉が事実上、〈岩波の子どもの本〉出版に関して編集・翻訳を手掛けたのは、この第1期出版の24冊であるが、第4期配本の1冊である『ひとまねこざる』¹が大ヒットしたことを受けて、岩波書店は原書キュリアス・ジョージのシリーズ絵本の続編を翻訳することを企画した。絵本の原書を持っていたのが光吉であったため、翻訳も依頼されたと推測される。〈岩波の子どもの本〉でキュリアス・ジョージ絵本は、光吉によって6冊翻訳された。シリーズの最後に翻訳された絵本『ひとまねこざる びょういんへいく』の出版が1968年であることから、これを第Ⅱ期の終点にする。以上のことから、第Ⅰ期の区切りと異なり、第Ⅱ期の終わりは光吉業績の区切りとなるが、岩波書店でのひとまねこざるシリーズの翻訳の仕事が終わる1968年とした。日本の戦後絵本史における〈岩波の子どもの本〉シリーズの役割と、シリーズ編集・翻訳の主要メンバーとしてたずさわった光吉の絵本翻訳を明らかにする。

第Ⅲ期は1969年から、没年の翌年1990年までとする。日本絵本史上、絵本が出版においても、質においても最盛期を迎えたのがこの第Ⅲ期の期間である。絵本が富裕層ばかりでなく、一般の子どもたちの手に取られ、絵本観が確立されてくる。第Ⅲ期において、光吉はこれまでに引き続き絵本、児童文学の翻訳はもちろん、絵本評論を多く手がけている。これと同時に、光吉は絵本を出版する側の仕事をふまえ、次第に絵本を評価する役割を担うようになった。この章では絵本出版と評論・研究の動向をふまえ、光吉業績の役割を明らかにする。なお、没年の翌年を第Ⅲ期の終わりとしたのは、生前に編集されていた絵本評論集が出版されたのが、光吉の没後であったためである。この評論集は絵本史において一定の評価を得たことから、本研究の光吉業績に入れるべきものであると考える。

以上が、光吉業績を分析するうえでの時代区分の妥当性とその根拠の説明である。以下は本研究における時代区分、日本の戦中・戦後の絵本史概観を図にあらわしたものである。

表1 本研究における時代区分、日本の戦中・戦後の絵本史概観



2. 人物像と年譜

ここでは、先行研究及び文献、関係者からのインタビューなどの調査から、筆者がまとめた人物像と年譜を明らかにする。

本研究における光吉の経歴調査のもとにした資料は、光吉の妻甲義子の遺した年譜「光吉夏弥年譜」(河田篤子編『光吉夏弥文庫目録』国立音楽大学附属図書館 1993年)である。この資料は、国立音楽大学附属図書館に寄贈された光吉の蒐集した舞踊関係の書籍・文献が、「光吉夏弥文庫」として公開される際に作成された目録に収録されている。光吉に一番近かった甲義子夫人が記述していることから、確実な情報源であると考えられる。この年譜をもとに事実関係を確認したが、不明な点も多く残されていた。そのため、光吉と児童書編集・翻訳の仕事を共にし、個人的な交流のあった関係者等からも話を聞いた。鳥越信氏(元岩波書店児童書編集者、元早稲田大学教授)、澤田精一氏(元福音館書店編集者)、三遠真智子氏(児童書翻訳家)、神宮輝夫氏(青山学院大学名誉教授、白百合女子大学児童文化研究センター客員所員)にインタビューを行った。

インタビューでの事実関係の確認、業績調査をふまえ、甲義子夫人作成の年譜を加筆修正し、以下の年譜を作成した。さらに、この年譜をもとに経歴をまとめた。

以下は、事典中の「光吉夏弥」項の記載事項2点である。ひとつは日本児童文学学会編『児童文学事典』(東京書籍 1988年)、もうひとつは大阪国際児童文学館編『日本児童文学大事典 第二巻』(大日本図書 1993年)に記載されたもので、それぞれ国内で最も光吉についての情報を大まかに網羅しているものと考えられる。これらの記載事項も年譜と経歴をまとめる際の手がかりとした。以下に、2点の文献を引用しておく。

犬飼和雄「光吉夏弥」日本児童文学学会編『児童文学事典』東京書籍 1988年(p.727)

光吉夏弥(みつよし/なつや)一九〇四～(明三七～)英米児童文学研究家、翻訳家。佐賀県に生まれ、慶応大学経済学部を卒業して、毎日新聞社の記者となり、その一方でバレエの研究、批判、写真や児童文学の仕事に従事。戦前、世界傑作絵本シリーズとしてリーフ『花と牛』他二冊を翻訳し、子どもにとって絵本がいかに重要かを主張し、今日の絵本の先駆的な仕事をする。戦後は石井桃子と組んで『岩波の子どもの本』という絵本シリーズを担当。なお光吉の訳した『ちびくろさんぼ』はベストセラーになり、戦後の絵本に大きな影響を与えた。また平凡社の『児童百科事典』では英米児童文学を紹介するなど、戦前から戦後にかけて、ことに幼年児童文学の世界で果たした役割は大きい。訳書も多く、『ひとまねこざる』(一九五六)、『キュリー夫人』(六四)、『トトの大てがら』(六八)、『大きなツリーと小さなツリー』(七七)、『ぼくはたんてい』(八二)シリーズ六冊などがある。

定松正「光吉夏弥」大阪国際児童文学館編『日本児童文学大事典 第二巻』大日本図
1993年(pp.184-185)

光吉夏弥(みつよし/なつや)一九〇四(明三七)年十一月二〇日～八九(平一)年三月七日。研究者、翻訳家、評論家。本名積男。佐賀県生まれ。慶大経済学部卒。毎日新聞記者時代には舞踊評論に健筆をふるい、舞踊界に強い影響を及ぼした。また、写真の分野にも深い関心を示した。この両分野での業績は『バレエへの誘い』、

デビット・シーモア『小さいのち』（翻訳）などに跡づけられている。

同時に、児童文学の分野にも早く関心を示し、四三年ころから「少国民文化」等に絵本に関する評論を発表。マンロー・リーフの『花と牛』（四二）をはじめとした絵本の翻訳にも着手する。戦後になって「少年少女」の初代編集長を務めるほか、『王さまのアイスクリーム』（四七）『みつばちの国のアリス』（四九）などの童話を創作、小泉八雲の作品集『ちんちん小袴』（四九）を翻訳するなど、多方面で活躍を始めた。また、『花と牛』の冒頭部に唱えられている「よい絵本は国民の幼いときからの美に対する正しい意識を培ふうへに、基礎的な重要さを持つ」という理念のもとに五三年から「岩波の子どもの本」の企画編集に携わった。イギリス・アメリカの絵本を中心に、わが国の昔話・童話に絵をそえたシリーズである。これらの絵本の翻訳と同時に、特に英米の幼年童話及びデフォー、キャロルなどの作品の翻訳を手がけ、我が国での海外児童文学の普及に務めた功績は大きい。

編集に参画した大日本図書の「幼年おはなし全集」（六三）では、『なんでもふたつ』『ぞうのはなはなぜながい』を自ら編んでいる。前者はインドの仏教説話、ヨーロッパの昔話、日本の童話集などから選択したユーモラスな話を再話したもの。また、光文社の「世界新名作童話」（五六～五七）の編集にも携わり、ビアトリクス・ポター、R・アトウォーター、ヒュー・ロフティングなどの作品を翻訳紹介している。

ほかに主な翻訳としてはラング『りこうすぎた王子』（五一）、トウェイン『トム・ソーヤの冒険』（六六）、アトウォーター『ホッパーさんのペンギン』（六六）、ジョン・コンネル『ふたたび宝島へ』（五一）など。また、絵本の新しい翻訳にH・A・レイの「ひとまねこざる」のシリーズ全六冊（五六～六八）、ユーモラスな幼年童話シリーズ「ゆかいなゆかいなおはなし」全二〇冊がある。さらに、児童文学の評論分野でも活躍し、とくに今日の海外児童文学研究への足がかりをも築いた。

[ちびくろ・さんぼ] 絵本。1953年12月岩波書店刊、「岩波の子どもの本」の第一編。ヘレン・バンナーマンの作品を企画・翻訳。黒人の子どものさんぼがジャングルで虎に衣類を奪われるが、機転で虎はバターに変わる。ページ調整のため、「サンボとふたごたち」をも収録。絵にはバンナーマンのものを使わず、マクミラン社版のフランク・ドビアスの絵をもとにしたが、レイアウトに手を加えているため、同社版とも異なっている。出版直後から子ども間で人気があり、ロングセラーとして定評があったが、のち、さんぼ・じゃんぼ・まんぼという登場人物の名や、虎が登場するにも関わらず、舞台がアフリカになっていることなどが黒人差別にあたることと批判され、88年12月に絶版となった。

[絵本図書館—世界の絵本作家たち—] 評論集。1990年1月ブックグローブ社刊。戦後、わが国で翻訳出版され、長く読み継がれている58人の外国の絵本作家に関する評論が収められた労作。著者の死後の刊行で、雑誌「月刊絵本」に連載（74年9月～77年5月）されたものを中心に編集した。

(1) 光吉夏弥 年譜

以下は、先行研究及び文献をもとに、筆者がまとめた光吉夏弥の年譜である。

1904年11月20日（明治37年）

父光吉元次郎、母なをの長男として大阪府北区北野茶屋町に生まれる。四男一女きょうだいの長子。本籍地佐賀県唐津市。本名 光吉積男（みつよし・つむを）。

1929年3月（昭和4年）

慶応義塾大学経済学部卒業。

1930年4月（昭和5年）

国際観光局入社。雑誌「トラベル・イン・ジャパン」編集主任。

1937年（昭和12年）

国際観光局退社。東京日日新聞学芸部嘱託。舞踊批評担当。対外写真通信及び、出版に従事。

1940年4月（昭和15年）

大阪毎日新聞社入社。文化部、編集部、出版部を経る。

1941年12月23日（昭和16年）

日本少国民文化協会創立、文学部会幹事となる。

（『日本少国民文化協会要覧』社団法人日本少国民文化協会 1943. 2）

1942年（昭和17年）

大阪毎日新聞社退社（出版部編集次長）。

1946年5月（昭和21年）

中央公論社入社（1946年5月-1948年8月）、雑誌『少年少女』を編集。

1948年8月（昭和23年）

中央公論社退社。

1950年4月（昭和25年）

岩波書店「少年少女の読み物百種委員会」委員となる。（『図書』岩波書店 1950. 12（pp. 12-14））

1953年9月（昭和28年）

岩波書店の嘱託社員として、石井桃子らと共に〈岩波の子ども本〉シリーズの編集をはじめ。（「岩波の子ども本（一）—その発行のころのことども」『月刊絵本』すばる書房盛光社（pp. 80-84））

1962年3月(昭和37年)

藤原義江氏をはじめとする文化施設団の一員として韓国訪問。

1966年(昭和41年)

アメリカ国務省に招待され、米国各地方を訪問する。

1969年(昭和44年)

文化庁芸術選奨の舞踊部門選考審査委員となる。

1989年3月7日(平成元年)

午後7時25分、肺気シュのため東京都大田九の安田病院で死亡。享年84歳。(朝日新聞)

1990年11月17日(平成2年)

『絵本図書館—世界の絵本作家たち—』に集成された欧米絵本の紹介、翻訳、研究の長年の尽力により、第14回日本児童文学学会特別賞受賞。

(2) 光吉夏弥 経歴

以下は、先行研究及び文献、関係者からのインタビューをもとに調査し、筆者がまとめた光吉夏弥の経歴である。

光吉夏弥の本名は、光吉積男(つむを)。1904年11月20日、父、元次郎、母、なをの長男として大阪府北区北野茶屋町に生まれる。出身は大阪であるが、東京で長く暮らしたといわれている。本籍地は、佐賀県唐津市である。父は貿易商を営み、後年、頼山陽『日本外史』(1873年)²の注釈に関わる研究者であった。

慶應義塾大学経済学部在学中には、当時同大学の「図書館長であった小泉信三氏の特別なはからいで、貴重な諸外国の洋書を閲覧することが許され、四年間はほとんど図書館にかよいつめだった」³という学生生活を送っていた。すでに大学在学中から、舞踊の評論を手掛けていたという。1929年3月に慶應義塾大学経済学部を卒業した後、当時の鉄道省、国際観光局に入り、雑誌『トラベル・イン・ジャパン』編集主任を務めた。1937年に退社する。

その後、東京日日新聞学芸部の嘱託となり、舞踊評論を担当。さらに対外写真通信及び出版に従事する。1940年には大阪毎日新聞社に入社し、文芸部、編集部、出版部を経て、出版部編集次長となる。この新聞記者時代に写真評論をはじめ、子どもの本にも関心を持つようになったという⁴。このころから既に、諸外国の洋書を蒐集していたという。

日中戦争をきっかけに戦火が激しくなるなか、児童文化にも統制が及ぶようになるこの頃になると、政府の意図により児童文化関係の諸団体が統合される。児童文化の統制団体である「日本少国民文化協会」が、1941年12月23日に設立する。光吉は、日本少国民文化協会の文学部幹事の一人として名を連ねている。1942年2月、筑摩書房の〈世界傑作絵本〉、『花と牛』、『フタゴノ象ノ子』二冊を翻訳出版する。この筑摩書房での翻訳出版が、児童書出版における光吉のはじめての仕事となる。1942年のおそらく3月、大阪毎日新聞社を退く。1943年9月の『生活美術』(絵本特集号)での評論「絵本の世界」

では、いち早く海外絵本を紹介した。この頃、「日本少国民文化協会」のプロパガンダ誌『少国民文化』に、海外児童文学の翻訳、及び翻訳論等を発表している。

終戦後の1946年5月には中央公論社に入社し、児童書部門の代表を務めた。雑誌『少年少女』の編集を手掛ける。その後、1948年8月に中央公論社を退社した後、文寿堂出版『金と銀』などの編集も手掛けた。

1950年、岩波書店の少年少女の読み物百種委員のひとりとなる。これは〈岩波少年文庫〉の母体となった児童文学リストである。光吉は、〈岩波少年文庫〉の翻訳作品を数冊翻訳している。1952年には、瀬田貞二の編集する平凡社『児童百科事典』の「児童文学」項を執筆した。

1953年9月、岩波書店から依頼を受け、絵本シリーズ〈岩波の子どもの本〉の編集・翻訳に社外ブレーンとして携わった。この絵本シリーズには多くの海外絵本が含まれていたが、そのほとんどが光吉の蔵書から原書提供されていた。光吉の児童書関連の蒐集は、海外児童書の原書のほか、児童文学関係の研究書、雑誌等にも及んでいた。

〈岩波の子どもの本〉の後も、旺盛に児童書の翻訳、評論を手掛けている。1970年代は雑誌『月刊絵本』や『子どもの館』への連載「子どもの本の世界から—その文献と資料」において秘蔵資料の公開や活発な評論活動が挙げられる。没後出版された単著書『絵本図書館—世界の絵本作家たち—』は、『月刊絵本』の連載をまとめたものであり、海外絵本の作家作品論の先鞭をつけた。これらのよく知られた仕事のほかにも、その時代の絵本出版のあり方を知る手がかりとなる翻訳や評論などを数多くのこしている。

光吉は舞踊評論家、写真評論家、児童書の翻訳者・評論家という3つの分野にわたって仕事をし、それぞれの分野において一家を成していた。洋書を中心とした専門書籍・文献を蒐集していたこともよく知られているが、舞踊・写真・児童書など関連書籍、雑誌などからパンフレットに至るまで蒐集していたという。光吉が国内外の情報をくまなく収集し、それらを情報整理したうえで、翻訳や評論をおこなっていたことは特筆に値する。光吉の蔵書と資料からは、単なるコレクターではなく、情報を整理していたことがうかがえる。的確な選書とするどい評論は、光吉の持っていた情報量と情報整理の賜物といえよう。晩年も児童書のみならず、舞踊、写真の評論家としても健筆をふるった。

光吉の手によって長年にわたり蒐集された蔵書は、光吉の没後、甲義子夫人によって各分野の専門機関に寄贈された。児童書関係のコレクションは、白百合女子大学児童文化研究センター「光吉文庫」として遺され、2006年から一般公開されている。舞踊関係は国立音楽大学附属図書館「光吉文庫」に、写真関係は東京都写真博物館にそれぞれ寄贈されている。

3. 業績一覧

先述のとおり、光吉業績を4期に分けたものが以下の一覧である。光吉の没後にどのようなものが再版、改版されているかを示すため、第Ⅲ期の最後1990年以降の業績も記載した。

表2 光吉夏弥 第Ⅰ期(前期・後期)業績一覧

光吉夏弥 [第Ⅰ期前期：1942-1945年] 業績(翻訳・評論・その他)		
年月日		事項
1942.02.25	翻訳	『花と牛』(世界傑作絵本) ムンロー・リーフ作、ロバート・ロウソン画、光吉夏弥訳 筑摩書房
1942.02.25	翻訳	『フタゴノ象ノ子』(世界傑作絵本) ホーガン作、光吉夏弥訳 筑摩書房
1942.03.15	翻訳	『支那の墨』クルト・ヴィーゼ作、光吉夏弥訳 筑摩書房
1942.04.20	翻訳	『小人島探検』光吉夏弥編 文林堂双魚房
1942.09.01	評論	「少国民文化展望 舞踊：文化財としての少国民舞踊」 『少国民文化』(p.13)
1942.10.01	評論	「少国民文化展望 舞踊：文化財としての少国民舞踊(2)」 『少国民文化』(p.106)
1942.11.01	評論	「少国民文化展望 舞踊：文化財としての少国民舞踊(3)」 『少国民文化』(p.73)
1943.01	評論	「翻訳者の反省」 『少国民文化』第2巻第1号 少国民文化協会(pp.80-82)
1943.04	評論	「南の絵本」 『少国民文化』第2巻第4号 少国民文化協会(pp.89-91)
1943.06.01	翻訳	「キリンの首はなぜ長い(シートン)」 『少国民文学』6月号(第11巻第1号) 社団法人日本少国民文化協会文学部会編集
1943.09	評論	「絵本の世界」 『生活美術』第3巻第9号 アトリエ社(pp.46-51)
1943.12.05	翻訳	『龍王の珠 支那の夜ばなし』 光吉夏弥訳 實業之日本社
1444.03	評論	「大東亜少国民文化の建設」 『少国民文化』第3巻第3号 少国民文化協会(pp.6-10)
1444.05	評論	「大東亜少国民文化の建設(承前)」 『少国民文化』第3巻第4号 少国民文化協会(pp.32-36)
光吉夏弥 [第Ⅰ期後期：1945-1968年] 業績(翻訳・評論・その他)		
年月日		事項
1946.11.05	翻訳	『大統領の人形たち』(新世界童話) 光吉夏弥訳 双珠社
1946.11.15	翻訳	『キリンの首はなぜ長い』(新世界童話) 光吉夏弥訳 双珠社
1947.01.05	評論	『日米ウイークリイ』1月5日 こどもの本の批評記事(伊藤元雄「あとがきにかえて」『絵本図書館—世界の絵本作家たち—』)
1947.11	評論	「こどものベストセラー」 『日本児童文学』第5号 日本児童

		文学者協会 (pp. 24-28)
1948. 02. 01	翻訳	「猫にきいた鼠の話 (一)」『少年少女』第1号 中央公論社
1948. 03. 01	翻訳	「猫にきいた鼠の話 (二)」『少年少女』第2号 中央公論社
1948. 03. 01	その他 (創作)	「なかよしログマ③」『日本のこども』光吉夏弥、安泰画 国民図書刊行会
1948. 03. 25	翻訳	『ちんちん小袴』(ともだち文庫 23)小泉八雲著、光吉夏弥訳 中央公論社
1948. 04. 01	その他 (創作)	「なかよしログマ④」『日本のこども』光吉夏弥、安泰画 国民図書刊行会
1948. 04. 01	翻訳	「猫にきいた鼠の話 (三)」『少年少女』4月号 (第3号) 中央公論社
1948. 05. 01	翻訳	「ガリバーのぼうけん」『こどもクラブ』光吉夏弥、松田文雄絵 大日本雄弁会講談社
1948. 05. 01	翻訳	「猫にきいた鼠の話 (四)」『少年少女』5月号 (第4号) 中央公論社
1948. 06. 01	翻訳	「猫にきいた鼠の話 (五)」『少年少女』6月号 (第5号) 中央公論社
1948. 07. 01	翻訳	「猫にきいた鼠の話 (六)」『少年少女』7月号 (第6号) 中央公論社
1948. 07. 30	翻訳	『王さまのクリーム』(こどもかい文庫)光吉夏弥著 桜井書店
1948. 09. 10	翻訳	「世界一周をした四人の子供たち (リーヤ)」 『金と銀』新装第1号 文寿堂出版
1948. 12. 01	翻訳	「やぶれた口絵 (マーク・トウェーン)」 『金と銀』新装第3号 文寿堂出版
1949. 01. 01	翻訳	「塀を塗るトム・ソーヤー」マーク・トウェーン、「クリスマスの幽霊」ディケンズ (こどものための世界の文学) 光吉夏弥編 『少年百科』第1集 日米出版社
1949. 04. 25	翻訳	「人は何で生きるか」トルストイ、「コゼット」ヴィクトル・ユーゴー (こどものための世界の文学) 光吉夏弥編 『少年百科』第2集 日米出版社
1949. 07. 15	翻訳	「リップ・ヴァン・ウィンクル」アーヴィング、「ミュンクハウゼン男爵の物語」ラスペ (こどものための世界の文学) 光吉夏弥編 『少年百科』第3集 日米出版社
1949. 10. 10	翻訳	「こがね蟲」エドガー・アラン・ポオ (こどものための世界の文学) 光吉夏弥編 『少年百科』第4集 日米出版社
1949. 10. 05	その他 (著)	『みつばちの国のアリス』(こども絵文庫 2)光吉夏弥著 羽田書店
1949. 10. 10	その他 (編著)	『象の本』光吉夏弥著 三十書房
1949. 12. 05	翻訳	『たくさんのお月さま』ジェイムズ・サーバー作、ルイス・スロボドキン画、光吉夏弥/訳 日米出版社

1949. 12. 15	翻訳	『ちんちん小袴』(日本童話名作選集 6) 小泉八雲著、光吉夏弥訳 三十書房
1950. 01. 10	翻訳	「王さまのクリーム」『王さまのクリーム』(現代童話作家選 第2集) 浜田 広介ほか、光吉夏弥著 桜井書店
1950. 01. 10	翻訳	「幸福な王子」オスカー・ワイルド、「黄金の川の王さま」ジョン・ラスキン (こどものための世界の文学) 光吉夏弥編『少年百科』第5集 日米出版社
1950. 03	その他 (脚本)	『日本学校劇選』(中学校篇) 児童文学者協会編 (光吉夏弥脚色「人は何で生きるか」) 桜井書店
1950. 03. 01	翻訳	『こっくりおばあさん』光吉夏弥著 大日本雄弁会講談社
1950. 03. 10	翻訳	「大きい石の顔」ナサニエル・ホーソン (こどものための世界の文学) 光吉夏弥編『少年百科』第6集 日米出版社
1950. 04. 15	翻訳	『エブラハム・リンカーン』イングリ・ドオレーア、エドガー・パーリン・ドオレーア作、光吉夏弥・進士益太訳 羽田書店
1950. 05. 10	翻訳	「王子の夢」ジャン・インジロー、「耳なし芳一の話」小泉八雲 (こどものための世界の文学) 光吉夏弥編『少年百科』第7集 日米出版社
1950. 07. 10	翻訳	「ピノッキオの冒険」コッロディ (こどものための世界の文学) 光吉夏弥編『少年百科』第8集 日米出版社
1950. 09. 10	翻訳	「真夏の夜の夢」メアリ・ラム、「ロンドン人形の思い出」リチャード・H・ホーン (こどものための世界の文学) 光吉夏弥編『少年百科』第9集 日米出版社
1950. 09. 25	評論	「最近のアメリカの児童図書——一九四一～一九四九」 『新児童文化』第6集 国民図書刊行会 (pp. 102-114)
1950. 11. 20	翻訳	「泥棒の親方」ノールウェイ民話、「けんやくの教え他2編」中国民話 (こどものための世界の文学) 光吉夏弥編『少年百科』第10集 日米出版社
1950. 11. 15	その他 (編著)	『サンタクロースの本』光吉夏弥著 三十書房
1951. 02. 15	翻訳	『こがね虫』(新児童文庫6) 光吉夏弥文、橋本妙画 三十書房
1951. 03. 10	翻訳	『ふたたび宝島へ』ジョン・コンネル著、光吉夏弥訳 英宝社
1951. 03. 15	翻訳	「白つぐみ物語」アルフレッド・ド・ミュッセ (こどものための世界の文学) 光吉夏弥編『少年百科』第11集 日米出版社
1951. 03. 15	翻訳	『りこうすぎた王子』(岩波少年文庫7)A・ラング著、光吉夏弥訳 岩波書店
1951. 06. 10	翻訳	「水の子トム」チャールス・キングスレイ『少年百科』第12集 日米出版社
1951. 07	その他 (エッセイ)	「やすやすと覚えられる 百科事典式勉強法」光吉夏弥 児童百科事典第3巻・月報『ぺりかん3』(pp. 7-9)
1951. 09. 01	翻訳	『白鳥の湖』(世界の絵本 中型版 13)光吉夏弥著、三林亮太郎絵

		新潮社
1951. 10	翻訳	「二つの話」光吉夏弥 児童百科事典第4巻・月報『ぺりかん4』 (pp. 5-7)
1952. 03	翻訳	「象のはなはなぜ長い」(無記名) 児童百科事典第6巻・月報『ぺりかん6』(pp. 8-11)
1952. 04. 15	翻訳	『世界をまわろう. 上』(岩波少年文庫30)V. M. ヒルヤー著、光吉夏弥訳 岩波書店
1952. 05. 15	翻訳	『世界をまわろう. 下』(岩波少年文庫32)V. M. ヒルヤー著、光吉夏弥訳 岩波書店
1952. 12. 10	その他 (分担執筆)	『児童百科事典 10 シキーシュ』「児童文学」(pp. 113-127)、 児童百科事典第10巻月報『児童文学へのみちしるべ』平凡社

表3 光吉夏弥 第Ⅱ期業績一覧

光吉夏弥 [第Ⅱ期：1953-1968年] 業績(翻訳・評論・その他)		
年月日		事項
1953. 12. 10	翻訳	『ちびくろ・さんぼ』(岩波の子どもの本)(第1回配本) [★岩波書店編集→光吉夏弥訳] 岩波書店
1953. 12. 10		『ふしぎなたいこ』(岩波の子どもの本)(第1回配本) [岩波書店編集→石井桃子] 岩波書店
1953. 12. 10	翻訳	『ねずみとおうさま』(岩波の子どもの本)(第1回配本) [岩波書店編集→石井桃子訳] 岩波書店
1953. 12. 10	翻訳	『みんなの世界』(岩波の子どもの本)(第1回配本) [★岩波書店編集→光吉夏弥訳] 岩波書店
1953. 12. 10	翻訳	『スザンナのお人形』(岩波の子どもの本)(第1回配本) [岩波書店編集→石井桃子訳] 岩波書店
1953. 12. 10	翻訳	『山のクリスマス』(岩波の子どもの本)(第1回配本) [★岩波書店編集→光吉夏弥訳] 岩波書店
1954. 04. 15	翻訳	『まいごのふたご』(岩波の子どもの本)(第2回配本) [岩波書店編集→石井桃子訳] 岩波書店
1954. 04. 15	翻訳	『おかあさんだいすき』(岩波の子どもの本)(第2回配本) [★岩波書店編集→光吉夏弥訳] 岩波書店
1954. 04. 15	翻訳	『ちいさいおうち』(岩波の子どもの本)(第2回配本) [岩波書店編集→石井桃子訳] 岩波書店
1954. 04. 15	翻訳	『ナマリの兵隊』(岩波の子どもの本)(第2回配本) [★岩波書店編集→光吉夏弥訳] 岩波書店
1954. 04. 15	翻訳	『海のおばけオーリー』(岩波の子どもの本)(第2回配本) [岩波書店編集→石井桃子訳] 岩波書店
1954. 04. 15	翻訳	『金のニワトリ』(岩波の子どもの本)(第2回配本) [★岩波書店編集→光吉夏弥訳] 岩波書店
1954. 09. 01	翻訳	『どうぶつのこどもたち』(岩波の子どもの本)(第3回配本) [岩波書店編集→石井桃子訳] 岩波書店
1954. 09. 01		『おそばのくきはなぜあかい』(岩波の子どもの本)(第3回配本) [岩波書店編集→石井桃子] 岩波書店
1954. 09. 01	翻訳	『もりのおばあさん』(岩波の子どもの本)(第3回配本) [岩波書店編集→光吉夏弥訳] 岩波書店
1954. 09. 01	翻訳	『アルプスのきょうだい』(岩波の子どもの本)(第3回配本) [★岩波書店編集→光吉夏弥訳] 岩波書店
1954. 09. 01	翻訳	『百まいのきもの』(岩波の子どもの本)(第3回配本) [岩波書店編集→石井桃子訳] 岩波書店
1954. 09. 01	翻訳	『村にダムができる』(岩波の子どもの本)(第3回配本) [★岩波書店編集→光吉夏弥訳] 岩波書店
1954. 11. 20	翻訳	『ロビンソン・クルーソー』(トッパンの絵物語) 光吉夏弥文、小田忠画 トッパン

1954	翻訳	『ピノキオ』（トッパンの絵物語） 光吉夏弥文、永田力画 トッパン
1954. 12. 10	翻訳	『ひとまねこざる』（岩波の子どもの本）（第4回配本）〔★ 岩波書店編集→光吉夏弥訳〕 岩波書店
1954. 12. 10	翻訳	『はなのすきなうし』（岩波の子どもの本）（第4回配本）〔★ 岩波書店編集→光吉夏弥訳〕 岩波書店
1954. 12. 10	翻訳	『こねこのぴっち』（岩波の子どもの本）（第4回配本）〔岩 波書店編集→石井桃子訳〕 岩波書店
1954. 12. 10	翻訳	『九月姫とウグイス』（岩波の子どもの本）（第4回配本）〔★ 岩波書店編集→光吉夏弥訳〕 岩波書店
1954. 12. 10	翻訳	『ツバメの歌』（岩波の子どもの本）（第4回配本）〔岩波書 店編集→石井桃子訳〕 岩波書店
1954. 12. 10	翻訳	『どうぶつ会議』（岩波の子どもの本）（第4回配本）〔★岩 波書店編集→光吉夏弥訳〕 岩波書店
1955. 02. 08	評論	「英米の児童文学賞」 亀井勝一郎・阪本一郎・滑川道夫・波 多野完治編『読書指導講座第9巻 児童読物と読書指導』 牧書店 (pp. 13-21)
1955. 12. 10	翻訳	『ふしぎな国のアリス』（トッパンの絵物語） 光吉夏弥文、 太田大八画 トッパン
1956. 04. 25	翻訳	『音楽の国のアリス』（岩波少年文庫）ラ・プラード作、光 吉夏弥訳 岩波書店
1956. 11. 25	翻訳	『クリスマス・カロール』（トッパンの絵物語） 光吉夏弥文、 杉全直画 トッパン
1956. 12. 01	翻訳	『じてんしゃにのるひとまねこざる』（岩波の子どもの本） エッチ・エイ・レイ文・絵、光吉夏弥訳 岩波書店
1956. 12. 15	翻訳	『ちびくろ・さんぼのぼうけん』（世界新名作童話 1：小学 1・2年向き）バンナーマン原作、光吉夏弥編 光文社
1956. 12. 15	翻訳	『ぴーたーうさぎのぼうけん』（世界新名作童話 2：小学1・ 2年向き）ポッター原作、光吉夏弥編 光文社
1956. 12. 15	翻訳	『家なき人形』（世界新名作童話 3：小学3・4年向き）ド・ レイオー原作、光吉夏弥訳 光文社
1956. 12. 15	翻訳	『町へきたペンギン』（世界新名作童話 4：小学3・4年向き） アトウォーター原作、光吉夏弥訳 光文社
1957. 04. 15	翻訳	『こねずみせんせい』（世界新名作童話 5：小学1・2年向き） フラック原作、光吉夏弥訳 光文社
1957. 04. 15	翻訳	『こわいこわいおおかみ』（世界新名作童話 6：小学1・2年 向き）マクリーリ原作、光吉夏弥訳 光文社
1957. 07. 15	翻訳	『たべものどろぼうと名探偵』（世界新名作童話 7：小学3・ 4年向き）ヒュー・ロフティング原作、光吉夏弥訳 光文社
1957. 07. 15	翻訳	『サーカスの一家』（世界新名作童話 8：小学3・4年向き） リリー・ジャン・ジャヴァル原作、光吉夏弥訳 光文社

1959. 01. 01	翻訳	『ガリバー旅行記』（講談社の絵本ゴールド版）光吉夏弥文、杉全忠絵 大日本雄弁会講談社
1959. 02. 20	翻訳	「ガリバー旅行記」スウィフト作、光吉夏弥訳 『ロビンソン・クルーソー漂流記／ガリバー旅行記』（世界名作全集4）平凡社
1959. 10. 10	翻訳	『アラビアン・ナイト』（世界童話文学全集12）飯島淳秀、光吉夏弥訳 講談社
1959. 15. 05	翻訳	『ろけっとこざる』（岩波の子どもの本）エッチ・エイ・レイ文・絵、光吉夏弥訳 岩波書店
1960. 10. 28	翻訳	「トム・ソーヤーの冒険」マーク・トゥェイン作、光吉夏弥訳 『アルプスの少女／トム・ソーヤーの冒険』（世界名作全集19）平凡社
1961. 08. 10	その他 (執筆)	「パブロワ」『少年少女世界伝記全集 9—ロシア編—』中村白葉・野村光一・日下実男作 講談社
1961. 10. 20	翻訳	「黒馬物語」シューエル作、光吉夏弥訳 『ジャングル・ブック／黒馬物語／ティモジーのくつ』（少年少女世界文学全集8 イギリス編第5巻）講談社
1962. 02. 10	翻訳	『世界をまわろう』（岩波少年少女文学全集27）ヒルヤー作、光吉夏弥訳 岩波書店
1962. 12. 10	翻訳	「キュリー夫人」ドーレイ作、光吉夏弥訳 『ガンジー伝／キュリー夫人』（岩波少年少女文学全集25）岩波書店
1963. 07. 18	翻訳	『りこうなおきさき』（岩波おはなしの本）モーゼス・ガスター文、光吉夏弥訳 岩波書店
1963. 10. 25	翻訳	『ぞうのはなはなぜながい』（幼年おはなし全集2）光吉夏弥編 大日本図書
1963. 12. 01	翻訳	『なんでもふたつ』（幼年おはなし全集5）光吉夏弥編 大日本図書
1965. 06. 18	翻訳	「クリスマス・カロール」ディケンズ作、光吉夏弥訳 『ジャングル・ブック／フランダーズの犬』（少年少女新世界文学全集4）講談社
1965. 08. 10	翻訳	『ポッパーさんのペンギン』リチャード・アトウォーター夫妻作、光吉夏弥訳 学習研究社
1966. 11. 10	翻訳	『トム・ソーヤーの冒険／ハックルベリイ・フィンの冒険』（少年少女世界の文学10）M. トウェイン 光吉夏弥・小島信夫訳 河出書房新社
1966. 11. 16	翻訳	『ひとまねこざるときいろいろし』（岩波の子どもの本）エッチ・エイ・レイ文・絵、光吉夏弥訳 岩波書店
1966. 11. 16	翻訳	『たこをあげるひとまねこざる』（岩波の子どもの本）マーガレット・レイ文、エッチ・エイ・レイ絵、光吉夏弥訳 岩波書店
1968. 00. 00	翻訳	『ふしぎの国のアリス』（トッパンの絵物語5）光吉夏弥文、

		太田大八絵 フレーベル館
1968.00.00	翻訳	『ピノキオ』（トッパンの絵物語 9）光吉夏弥文、永田力絵 フレーベル館
1968.00.00	翻訳	『クリスマス・カール』（トッパンの絵物語 10）光吉夏弥文、 杉全直絵 フレーベル館
1968.00.00	翻訳	『ロビンソン・クルーソー』（トッパンの絵物語 12）光吉夏 弥文、小田忠絵 フレーベル館
1968.03.25	評論	「子どもの本の世界 1 “ドリトル先生ブーム”」週刊読書 人
1968.04.01	評論	「子どもの本の世界 2 子どものためのペーパーボックス」 週刊読書人
1968.04.08	評論	「子どもの本の世界 3 研究書の多彩な開花」週刊読書人
1968.04.15	評論	「子どもの本の世界 4 子どものためのノン・フィクション」 週刊読書人
1968.07.00	その他 (エッセイ)	「トム・ソーヤの町」『図書』岩波書店
1968.07.15	翻訳	『おうさまのたけうま』（新しい世界の幼年童話・5）ドク ター・スース作、光吉夏弥訳、司修絵 学習研究社
1968.07.19	翻訳	『トトの大てがら』（岩波のおはなしの本）C・H・ビショッ プ作、光吉夏弥訳、萩太郎絵 岩波書店
1968.12.05	翻訳	『ひとまねこざるびょういんへいく』（岩波の子どもの本） マーガレット・レイ文、エッチ・エイ・レイ絵、光吉夏弥訳 岩波書店

注：表中★は、初版では「岩波書店編集」となっていたものが、後年「光吉夏弥訳」と改められ、翻訳者名を記載されたものを示す。

表4 光吉夏弥 第Ⅲ期業績一覧

光吉夏弥 [第Ⅲ期：1969-1990年] 業績（翻訳・評論・その他）		
年月日		事項
1969.02.20	翻訳	『みつばちじいさんのたび』（新しい世界の幼年童話12）フランク・ストックトン作、モーリス・センダック絵、光吉夏弥訳 学習研究社
1969.11.01	翻訳	『りこうなおきさき』（ABCブック）光吉夏弥文、岩崎ちひろ絵 世界出版社
1973.00.00	翻訳	『白鳥になったアヒルの子（アンデルセン）』（世界の伝記18）ルーマー・ゴッデン著、光吉夏弥訳 学習研究社
1973.03.16	翻訳	『名探偵フレディの冒険』神宮輝夫ほか編集（こどもの世界文学9）ウォルター・ブルックス作、光吉夏弥訳、竹山のぼる絵 講談社
1973.05.00	その他 （エッセイ）	「岩波の子どもの本（一）—その発行のころのことども」『月刊絵本』すばる書房盛光社（pp.80-84）
1973.06.00	その他 （エッセイ）	「岩波の子どもの本（二）—その発行のころのことども」『月刊絵本』すばる書房盛光社（pp.112-115）
1974.07.01	評論	「新連載：子どもの本の世界から—その文献と資料1 文献絵本をつくる バージニア・リー・バートン」『子どもの館』14号 福音館書店（pp.68-72）
1974.08.01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料2 資料絵本のタイムテーブル ジャン・P・コルビー」『子どもの館』15号 福音館書店（pp.90-96）
1974.09.01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料3 絵本の創作 エドワード・アーディゾーニ」『子どもの館』16号 福音館書店（pp.74-80）
1974.09.01	評論	「絵本の世界1 写真絵本」『月刊絵本』第2巻第8号 すばる書房盛光社（pp.44-47）
1974.10.01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料4 絵本の特質 マーシア・ブラウン」『子どもの館』17号 福音館書店（pp.88-98）
1974.10.01	評論	「絵本の世界2 ルドウィッヒ・ベーメルマンズ」『月刊絵本』第2巻第9号 すばる書房盛光社（pp.56-60）
1974.11.01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料5 ランドルフ・コールデコット バーサ・マホニー・ミラー」『子どもの館』18号 福音館書店（pp.50-57）
1974.11.01	評論	「絵本の世界3 マーガレット・ワイズ・ブラウンと三人の“ミスター”ブラウン」『月刊絵本』第2巻第10号 すばる書房盛光社（pp.65-69）

1974. 11. 13	翻訳	『キュリー夫人』(岩波少年文庫) ユリナー・ドーレイ作、光吉夏弥訳 岩波書店
1974. 12. 01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料6 ディズニーを糾弾する フランセス・クラーク・セーヤーズ」『子どもの館』19号 福音館書店 (pp. 62-69)
1974. 12. 01	評論	「絵本の世界4 “おさるのジョージ”のH・A・レイ」『月刊絵本』第2巻第11号 すばる書房盛光社 (pp. 47-51)
1975. 01. 01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料7 中国のアヒル エリザベス・R・モンゴメリ」『子どもの館』20号 福音館書店 (pp. 78-84)
1975. 01. 01	評論	「絵本の世界5 ヨーロッパ・アメリカ／絵本の旅」『月刊絵本』第3巻第1号 すばる書房盛光社 (pp. 54-58)
1975. 02. 01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料8 グリーナウェイの芸術 ロバート・ローソン」『子どもの館』21号 福音館書店 (pp. 70-76)
1975. 02. 01	評論	「絵本の世界6 絵本作家としてのリオ・リオニ」『月刊絵本』第3巻第2号 すばる書房盛光社 (pp. 61-64)
1975. 03. 01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料9 わたしたちの絵本づくり ヘーダー夫妻」『子どもの館』22号 福音館書店 (pp. 84-89)
1975. 03. 01	評論	「絵本の世界7 デュボアザンの動物たち」『月刊絵本』第3巻第3号 すばる書房盛光社 (pp. 48-51)
1975. 04. 01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料10 コラージュについて エズラ・ジャック・キーツ」『子どもの館』23号 福音館書店 (pp. 68-74)
1975. 04. 01	評論	「絵本の世界8 多芸多才のマーシア・ブラウン」『月刊絵本』第3巻第4号 すばる書房盛光社 (pp. 48-51)
1975. 05. 01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料11 子どもにはすべてを ロバート・ローソン」『子どもの館』24号 福音館書店 (pp. 120-127)
1975. 05. 01	評論	「絵本の世界9 二人のロシアの亡命画家」『月刊絵本』第3巻第5号 すばる書房盛光社 (pp. 50-54)
1975. 06. 01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料12 イメージの時代 ベニ・モントレソール」『子どもの館』25号 福音館書店 (pp. 78-84)
1975. 06. 01	評論	「絵本の世界10 バージニア・リー・バートン」『月刊絵本』第3巻第6号 すばる書房盛光社 (pp. 43-47)
1975. 07. 01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料13 ビアトリクス・ポター ルーマー・ゴッデン」『子どもの館』26号 福音館書店 (pp. 88-94)
1975. 07. 01	評論	「絵本の世界11 絵と文のカップル・チームドーレア夫

		妻とピーターシャム夫妻『月刊絵本』第3巻第7号 すばる書房盛光社 (pp. 53-57)
1975. 08. 01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料14 アーサー・ラッカム エレン・シャッフアー」『子どもの館』27号 福音館書店 (pp. 82-88)
1975. 08. 01	評論	「絵本の世界12 ワンダ・ガークの民話の世界」『月刊絵本』第3巻第8号 すばる書房盛光社 (pp. 53-57)
1975. 09. 01	評論	「絵本の世界13 コラージュのE・J・キーツ」『月刊絵本』第3巻第9号 すばる書房盛光社 (pp. 66-70)
1975. 10. 01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料15 センダック氏の仕事場で L・B・ホプキンス」『子どもの館』29号 福音館書店 (pp. 118-127)
1975. 10. 01	評論	「絵本の世界14 ロバート・ローソン」『月刊絵本』第3巻第10号 すばる書房盛光社 (pp. 58-62)
1975. 11. 01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料16 ジェイムズ・サーバーとの対話 A・クック」『子どもの館』30号 福音館書店 (pp. 104-110)
1975. 11. 01	評論	「絵本の世界15 ヨーロッパからアメリカへ シュレヴィッツ/ガルドーン/モントレソール」『月刊絵本』第3巻第11号 すばる書房盛光社 (pp. 56-60)
1975. 12. 01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料17 イーラの写真絵本 ジェーコブ・デシン」『子どもの館』31号 福音館書店 (pp. 122-127)
1975. 12. 01	評論	「絵本の世界16 ヨーロッパからアメリカへ “ニコラス” とアンゲラー」『月刊絵本』第3巻第12号 すばる書房盛光社 (pp. 56-60)
1976. 01. 01	評論	「絵本の世界17 ヨーロッパからアメリカへ シマント/スピーア/シドジャコフ/シミン」『月刊絵本』第4巻第1号 すばる書房盛光社 (pp. 51-55)
1976. 02. 01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料18 子どもの本の絵について ベッティーナ(エールリヒ)」『子どもの館』33号 福音館書店 (pp. 122-127)
1976. 02. 01	評論	「絵本の世界18 ヨーロッパからアメリカへ ドマンスカ/ケペシュ/シャロー/テングレン/ワイル」『月刊絵本』第4巻第2号 すばる書房盛光社 (pp. 67-71)
1976. 03. 01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料19 フランスは遅れている クリスチーニ・シャヌー」『子どもの館』34号 福音館書店 (pp. 122-127)
1976. 03. 01	評論	「絵本の世界19 SL絵本あれこれ」『月刊絵本』第4巻第3号 すばる書房盛光社 (pp. 60-64)
1976. 04. 01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料20 古典の描

		き直し ジョン・ルイス」『子どもの館』35号 福音館書店 (pp. 122-127)
1976. 04. 01	評論	「絵本の世界20 アメリカ生まれのアメリカ育ち〈その1〉ラスロップ/スーエル/レンスキー」『月刊絵本』第4巻第4号 すばる書房盛光社 (pp. 55-59)
1976. 05. 01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料21 手彩色からカラー印刷へ パーシー・ミューア」『子どもの館』36号 福音館書店 (pp. 121-127)
1976. 05. 01	評論	「絵本の世界21 アメリカ生まれのアメリカ育ち〈その2〉マージョリー・フラック/ヘイダー夫妻」『月刊絵本』第4巻第5号 すばる書房盛光社 (pp. 43-47)
1976. 05. 01	翻訳	『ポッパーさんのペンギン』(学研小学生文庫 8) リチャード・アトウォーター夫妻作、光吉夏弥訳、若菜睦絵 学習研究社
1976. 06. 01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料22 絵本の爆発 フランツ・カスパル (スイス児童文学研究所長)」『子どもの館』37号 福音館書店 (pp. 70-74)
1976. 06. 01	評論	「絵本の世界22 アメリカ生まれのアメリカ育ち〈その3〉バーバラ・クーニー/ダーラフ・イプカー/マリー・ホール・エッツ」『月刊絵本』第4巻第7号 すばる書房盛光社 (pp. 50-54)
1976. 06. 01	評論	「『クマのプーさん』の E.H. シェパード」『図書』岩波書店 (pp. 40-44)
1976. 07. 01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料23 クイズ20問 ルイス・ハーショー、ディク・マクビーン」『子どもの館』38号 福音館書店 (pp. 125-128)
1976. 07. 01	評論	「絵本の世界23 アメリカ生まれのアメリカ育ち〈その4〉アダムス/ホーバン/プローベンセン」『月刊絵本』第4巻第9号 すばる書房盛光社 (pp. 54-57)
1976. 08. 01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料24 『四人姉妹』の家 フランシス・スティーグマラー」『子どもの館』39号 福音館書店 (pp. 122-127)
1976. 08. 01	評論	「絵本の世界24 アメリカ生まれのアメリカ育ち〈その5〉ジーマック/ホグロギアン/ネス」『月刊絵本』第4巻第11号 すばる書房盛光社 (pp. 41-45)
1976. 09. 01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料25 人魚姫の嘆きだれが彼女の首を奪ったか?」『子どもの館』40号 福音館書店 (pp. 120-127)
1976. 09. 01	評論	「絵本の世界25 アメリカ生まれのアメリカ育ち〈その6〉

		ジョーン・ウォルシュ・アングルンドとバージニア・カール」 『月刊絵本』第4巻第13号 すばる書房盛光社 (pp. 50-53)
1976. 09. 20	翻訳	『ガンピーさんのふなあそび』ジョン・バーニングム作、光吉夏弥訳 ほるぷ出版
1976. 10. 01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料26 ピーター・パンとわたし ウォルト・ディズニー」『子どもの館』41号 福音館書店 (pp. 122-127)
1976. 10. 01	評論	「絵本の世界26 アメリカ生まれのアメリカ育ち〈その7〉ミルハウスとバーカート」『月刊絵本』第4巻第14号 すばる書房盛光社 (pp. 52-56)
1976. 11. 01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料27 オズの魔法使い ジョセフ・ハース」『子どもの館』42号 福音館書店 (pp. 122-127)
1976. 11. 01	評論	「絵本の世界27 アメリカ生まれのアメリカ育ち—ストーン/アリキ/カスキ/エイヤー」『月刊絵本』第4巻第16号 すばる書房盛光社 (pp. 43-47)
1976. 12. 01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料28 『小公子』異聞 コンスタンス・ビュエル・バーネット」『子どもの館』43号 福音館書店 (pp. 122-127)
1976. 12. 01	評論	「絵本の世界28 アメリカ生まれのアメリカ育ち〈その9〉ジョンソンとウェーバー」『月刊絵本』第4巻第17号 すばる書房盛光社 (pp. 57-61)
1976. 12. 10	翻訳	『クリスマス・カール』(玉川子ども図書館) ディケンズ作、光吉夏弥訳、花野原芳明絵 玉川大学出版部
1977. 01. 01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料29 ピーター・ラビットの名親ソーントン・バージェス ロバート・フロマン」『子どもの館』44号 福音館書店 (pp. 119-127)
1977. 01. 01	評論	「絵本の世界29 アメリカ生まれのアメリカ育ち〈その10〉スタイクとフリーマン」『月刊絵本』第5巻第1号 すばる書房盛光社 (pp. 75-79)
1977. 02. 01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料30 “写真家” ルイス・キャロル ブルース・ダウンス」『子どもの館』45号 福音館書店 (pp. 122-127)
1977. 02. 01	評論	「世界の絵本賞」『月刊絵本』第5巻第2号 すばる書房盛光社 (pp. 6-45)
1977. 03. 01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料31 「アリス」・オン・ステージ」『子どもの館』46号 福音館書店 (pp. 122-127)
1977. 03. 01	評論	「絵本の世界30 アメリカ生まれのアメリカ育ち〈その11〉A・ロベルとR・シャーリップ」『月刊絵本』第5巻第

		4号 すばる書房盛光社 (pp. 76-80)
1977. 04. 01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料32 ピノッキオ讚 アイダ・シュレーダー」『子どもの館』47号 福音館書店 (pp. 121-127)
1977. 04. 01	評論	「絵本の世界31 ハーディー・グラマトキーとレオ・ポリティ」『月刊絵本』第5巻第5号 すばる書房盛光社 (pp. 61-65)
1977. 05. 00	評論	「世界の絵本—その誕生から現代まで」『絵本の教室』偕成社 (pp. 2-15)
1977. 05. 01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料33 昔ばなしのH・クールランダー ダイアン・ウォルクスタイン」『子どもの館』48号 福音館書店 (pp. 124-127)
1977. 05. 01	評論	「絵本の世界32 R・クラウド/C・ハード/B・レント アメリカ生まれのアメリカ育ち13」『月刊絵本』第5巻第6号 すばる書房盛光社 (pp. 79-83)
1977. 06. 01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料34 摩天楼を建てよう、だが、まず、よい本を見つけよう ロアルド・ダール」『子どもの館』49号 福音館書店 (pp. 120-127)
1977. 07. 01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料35 『クリスマス・カロール』エドガー・ジョンソン」『子どもの館』50号 福音館書店 (pp. 124-127)
1977. 07. 05	翻訳	『しろいいぬ?くろいいぬ?』(ゆかいなゆかいなおはなし) マリオン・ベルデン・クック作、光吉夏弥訳、池田龍雄絵 大日本図書
1977. 07. 30	翻訳	『“なんでもふたつ”さん』(ゆかいなゆかいなおはなし) W. S. クラッチ作、光吉夏弥訳、クルト・ビーゼ絵、太田大八装幀 大日本図書
1977. 08. 01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料36 シャーロック・ホームズとの最初の出会い エラリー・クイーン」『子どもの館』51号 福音館書店 (pp. 122-127)
1977. 09. 01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料37 チャールズ・J・フィンガー (1869-1941) のこと ヘレン・フィンガー・レフラー」『子どもの館』52号 福音館書店 (pp. 122-127)
1977. 09. 30	翻訳	『だんごをなくしたおばあさん』(ゆかいなゆかいなおはなし) 小泉八雲作、光吉夏弥訳、平山英三絵、平山英三・久住和代装幀 大日本図書
1977. 09. 30	翻訳	『あべこべものがたり』(ゆかいなゆかいなおはなし) 北欧民話、光吉夏弥訳、箕田源二郎絵 大日本図書
1977. 10. 01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料38

		子どものための本選びについて—おとなに苦しめられる 小さな読者のための人権宣言— ドロシー・カンフィールド ド・フィシャー」『子どもの館』53号 福音館書店 (pp. 121-127)
1977. 11. 01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料39 「パッフィン ンの生みの親エリナー・グレーアム」『子どもの館』54号 福音館書店 (pp. 122-127)
1977. 11. 10	翻訳	『大きいツリー小さいツリー』(ゆかいなゆかいなおはなし) ロバート・バリー作、光吉夏弥訳 大日本図書
1977. 12. 01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料40 ルネ・ギヨ のこと グウェン・マーシュ」『子どもの館』55号 福音館 書店 (pp. 122-127)
1978. 01. 01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料41 ポール・ア ザールのこと マーグリット・ミッチェル」『子どもの館』 56号 福音館書店 (pp. 122-127)
1978. 02. 01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料42 父ジョー ゼフ・ジェイコブズの思い出 メイ・ブラッドジョー・ヘー ズ」『子どもの館』57号 福音館書店 (pp. 122-127)
1978. 03. 01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料43 エーリ ヒ・ケストナー その芸術と現実 R・W・ラスト」『子ど もの館』58号 福音館書店 (pp. 122-127)
1978. 03. 31	翻訳	『うさぎがいっぱい』(ゆかいなゆかいなおはなし) ペギー・ パリシュ作、光吉夏弥訳、エオナード・ケスラー絵 大日本 図書
1978. 04. 01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料44 キプリン グのジャングル 現実か空想か ローナ・ガーテ」『子ど もの館』59号 福音館書店 (pp. 122-127)
1978. 04. 01	翻訳	『ガンピーさんのドライブ』ジョン・バーニンガム作、光吉 夏弥訳 ほるぷ出版
1978. 04. 21	翻訳	『おさらをあらわなかったおじさん』(岩波の子どもの本) フィリス・クラジラフスキー文、バーバラ・クーニー絵、光 吉夏弥訳 岩波書店
1978. 05. 01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料45 いろい ろな色の上着 ラングのカラー童話集」『子どもの館』60号 福 音館書店 (pp. 121-127)
1978. 05. 10	翻訳	『トミーは大いそぎ』(ゆかいなゆかいなおはなし) ヘレン・ パーマー作、光吉夏弥訳、赤坂三好絵 大日本図書
1978. 06. 01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料46 ドリトル 先生 その生涯と仕事 ヘレン・ディーン・フィッシュ」『子 どもの館』61号 福音館書店 (pp. 122-127)
1978. 06. 20	翻訳	『おばけのジョージ』ロバート・ブライト作、光吉夏弥訳

		福音館書店
1978. 07. 05	編集	「選定にあたって」『えほんのせかい 原本ほるぷ世界の絵本第7集解説書 グリム・アンデルセンの世界』ほるぷ出版 (p. 2)
1978. 08. 01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料47 サミュエル・マルシャーク 1887-1964 ミリアム・モートン」『子どもの館』63号 福音館書店 (pp. 120-127)
1978. 09. 01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料48 途方もないスクラップブック ひとりの主婦が築いた『マイ・ブック・ハウス』」『子どもの館』64号 福音館書店 (pp. 122-127)
1978. 09. 01	評論	「国際児童年と昔ばなし」『子どもと本』No. 1 ほるぷ出版 (pp. 3-5)
1978. 10. 01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料49 アン・キャロル・ムーア J・D・ニュース」『子どもの館』65号 福音館書店 (pp. 121-127)
1978. 10. 30	翻訳	『王さまのアイスクリーム』(ゆかいなゆかいなおはなし) フランセス・ステリット文、光吉夏弥訳、土方重巳絵 大日本図書
1978. 10. 31	翻訳	『ともだちができちゃった!』(ゆかいなゆかいなおはなし) セラ・アシャロン文、光吉夏弥訳、スーザン・パール絵 大日本図書
1978. 11. 01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料50 オブライエンと白銀の犬 エリザベス・ライダー・モンゴメリー」『子どもの館』66号 福音館書店 (pp. 122-127)
1978. 11. 15	翻訳	『なまけねずみのウォルター』マージョリー・フラック作、光吉夏弥訳、中谷千代子絵 福音館書店
1978. 12. 01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料51 ペール・カストールをしのぶ ベッティーナ・ヒューリマン」『子どもの館』67号 福音館書店 (pp. 120-125)
1979. 01. 01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料52 『仔鹿物語』(『イヤリング』)について マージョリー・K・ローリングス」『子どもの館』68号 福音館書店 (pp. 122-127)
1979. 02. 01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料53 『黄金の川の王さま』 メイ・ランバートン・ベッカー」『子どもの館』69号 福音館書店 (pp. 122-127)
1979. 03. 01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料54 ストーリーテリングと昔話 フランセス・C・セイアーズ」『子どもの館』70号 福音館書店 (pp. 122-127)
1979. 05. 01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料55 アーネスト・トムソン・シートン ロジャー・ランスリン・グリーン」『子どもの館』72号 福音館書店 (pp. 121-127)

1979.06.01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料56 ハイジはいまも跳んでいく エリザベス・エンライト」『子どもの館』73号 福音館書店 (pp.122-127)
1979.06.01	評論	「動物絵本は楽しい—その流れと発展」『えほんのせかい 原本ほるぷ世界の絵本第8集解説書』ほるぷ出版(pp.50-54)
1979.07.01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料57 戦争を醸し出した彼女の本 フォレスト・ウィルソン」『子どもの館』74号 福音館書店 (pp.122-127)
1979.07.15	翻訳	『ちびっこ大せんしゅ』(ゆかいなゆかいなおはなし) シド・ホフ文と絵、光吉夏弥訳 大日本図書
1979.08.01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料58 ノエル・ストレット・フィールド エリック・リーランド」『子どもの館』75号 福音館書店 (pp.123-127)
1979.08.31	翻訳	『おとこの子とおもっていた犬』(ゆかいなゆかいなおはなし) コーラ・アネット作、ウォルター・ロレイン絵 光吉夏弥訳 大日本図書
1979.09.01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料59 ノルウェーから来たストーリーテラー ジャスミン・プリトン」『子どもの館』76号 福音館書店 (pp.122-127)
1979.10.01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料60 P・L・トラヴァース リー・ベニット・ホプキンズ」『子どもの館』77号 福音館書店 (pp.122-127)
1979.10.01	翻訳・編集	『世界むかし話11 東南アジア 象のふろおけ』光吉夏弥訳、テプシリ・スークソパ絵 ほるぷ出版
1979.10.01	翻訳・編集	『世界むかし話13 インド 魔法のゆびわ』光吉夏弥訳、畠中光享絵 ほるぷ出版
1979.10.01	翻訳・編集	『世界むかし話16 太平洋 マウイの五つの大てがら』光吉夏弥訳、チャールズ・キーピング絵 ほるぷ出版
1979.11.00	翻案	「おばあさんとあひるたち」ホープ・ニューウェル作、光吉夏弥文、黒井健絵 『よいこのくに』第28巻第8号 学習研究社(pp.20-31)
1979.12.01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料61 トム・ソーヤの町 ジョン・A・ウィンクラー」『子どもの館』79号 福音館書店 (pp.122-125)
1979.12.09	翻訳	『アーサーといもうと』リアン・ホーバン作、光吉夏弥訳 文化出版局
1979.12.15	翻訳	『でっかいねずみとちっちゃなライオン』(ゆかいなゆかいなおはなし) イブ・タイタス文、光吉夏弥訳、レオナード・ワイズガード絵 大日本図書
1980.01.01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料62 マーク・トウェーンの洞穴」『子どもの館』80号 福音館書店

		(pp. 122-127)
1980. 02. 01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料6 3 “木はいいなあ” リー・ベネット・ホプキンズ」『子どもの館』81号 福音館書店 (pp. 122-127)
1980. 03. 01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料6 4 ジュール・ヴェルヌ ハリー・G・トンプキンズ」『子どもの館』82号 福音館書店 (pp. 121-127)
1980. 04. 01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料6 5 H・G・ウェルズの概要 ゴッドフリー・スミス」『子どもの館』83号 福音館書店 (pp. 122-127)
1980. 05. 01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料6 6 『レベッカ』のケイト・ダグラス・ウィギン ローラ・ベネイ」『子どもの館』84号 福音館書店 (pp. 122-127)
1980. 06. 01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料6 7 『スイスのロビンソン』 エリザベス・ライダー・モントゴメリー」『子どもの館』85号 福音館書店 (pp. 122-127)
1980. 07. 01	評論	「子どもの本の世界から—その文献と資料 最終回 幼児のための作家ゾロトウ リー・ベネット・ホプキンズ」『子どもの館』86号 福音館書店 (pp. 121-127)
1980. 08. 21	その他 (追悼文)	「最初と最後の仕事を一緒に」『旅の仲間—瀬田貞二追悼文集』追悼文集編集委員会編、瀬田きくよ (pp. 139-141)
1980. 09. 30	翻訳	『ねことバイオリン』(ゆかいなゆかいなおはなし) タマラ・キット文、光吉夏弥訳、ウィリアム・ラッセル絵 大日本図書
1981. 09. 15	翻訳	『きりんのセシリーと9ひきのさるたち』H. A. レイ文・絵、光吉夏弥訳 メルヘン社
1982. 09. 30	翻訳	『きえた犬のえ』(ぼくはめいたんてい1) マージョリー・W・シャーマット文、マーク・シマント絵、光吉夏弥訳 大日本図書
1982. 09. 30	翻訳	『まよなかのはんにん』(ぼくはめいたんてい2) マージョリー・W・シャーマット文、マーク・シマント絵、光吉夏弥訳 大日本図書
1982. 09. 30	翻訳	『なくなったかいものメモ』(ぼくはめいたんてい3) マージョリー・W・シャーマット文、マーク・シマント絵、光吉夏弥訳 大日本図書
1982. 09. 30	翻訳	『きょうりゅうのきつて』(ぼくはめいたんてい4) マージョリー・W・シャーマット文、マーク・シマント絵、光吉夏弥訳 大日本図書
1982. 09. 30	翻訳	『かぎはどこだ』(ぼくはめいたんてい5) マージョリー・W・シャーマット文、マーク・シマント絵、光吉夏弥訳 大

		日本図書
1982. 09. 30	翻訳	『ゆきの中のふしぎなできごと』(ぼくはめいたんてい6) マージョリー・W・シャーマット文、マーク・シマント絵、光吉夏弥訳 大日本図書
1983. 02. 28	翻訳	『ねこはやっぱりねこがいい』(ゆかいなゆかいなおはなし) ヘレン・ヒル文、光吉夏弥訳、かみやしん絵 大日本図書
1983. 02. 28	翻訳	『とらとおじいさん』(ゆかいなゆかいなおはなし) アルビン・トレセルト文、光吉夏弥訳、アルバート・アキノ絵 大日本図書
1983. 02. 28	翻訳	『わにのはいた』(ゆかいなゆかいなおはなし) マーガリット・ドリアン文と絵、光吉夏弥訳 大日本図書
1983. 09. 26	翻訳	『ひとまねこざるときいろいろいぼうし』(大型絵本 ひとまねこざる第1集) H.A.レイ文・絵、光吉夏弥訳 岩波書店
1983. 09. 26	翻訳	『ひとまねこざる』(大型絵本 ひとまねこざる第1集) H.A.レイ文・絵、光吉夏弥訳 岩波書店
1983. 09. 26	翻訳	『じてんしゃにのるひとまねこざる』(大型絵本 ひとまねこざる第1集) H.A.レイ文・絵、光吉夏弥訳 岩波書店
1984. 03. 12	翻訳	『ろけつとこざる』(大型絵本 ひとまねこざる第2集) M.レイ、H.A.レイ文・絵、光吉夏弥訳 岩波書店
1984. 03. 12	翻訳	『たこをあげるひとまねこざる』(大型絵本 ひとまねこざる第2集) M.レイ、H.A.レイ文・絵、光吉夏弥訳 岩波書店
1984. 03. 12	翻訳	『ひとまねこざるびょういんへいく』(大型絵本 ひとまねこざる第2集) M.レイ、H.A.レイ文・絵、光吉夏弥訳 岩波書店
1984. 04. 00	評論	「絵本の世界から1 大きい絵本と小さい絵本—絵本の大きさと形—」普及版こどものとも折り込みふろく「絵本のたのしみ」1984-4 福音館書店 (pp.2-3)
1984. 05. 00	評論	「絵本の世界から2 “トイ・ブック”の楽しさ(1)—かずかずの工夫とアイデア—」普及版こどものとも折り込みふろく「絵本のたのしみ」1984-5 福音館書店 (pp.2-3)
1984. 06. 00	評論	「絵本の世界から3 “トイ・ブック”の楽しさ(2)—かずかずの工夫とアイデア—」普及版こどものとも折り込みふろく「絵本のたのしみ」1984-6 福音館書店 (pp.2-3)
1984. 07. 00	評論	「絵本の世界から4 絵本のメディア(1)—ブラウンの多芸さ—」普及版こどものとも折り込みふろく「絵本のたのしみ」1984-7 福音館書店 (pp.2-3)
1984. 10. 00	評論	「絵本の世界から5 絵本のメディア(2)—コラージュ(貼り絵)—」普及版こどものとも折り込みふろく「絵本のたのしみ」1984-10 福音館書店 (pp.2-3)
1984. 11. 00	評論	「絵本の世界から6 絵本のメディア(3)—写真絵本—」普及版こどものとも折り込みふろく「絵本のたのしみ」

		1984-11 福音館書店 (pp. 2-3)
1984. 11. 30	翻訳	『クリスマスってなんなの?』(ゆかいなゆかいなおはなし) ヘレン・モンセル作、光吉夏弥訳、津田櫓冬絵 大日本図書
1984. 12. 00	評論	「絵本の世界から7 絵本のカラー—単色と多色(1)—」普及版こどものとも折り込みふろく「絵本のたのしみ」1984-12 福音館書店 (pp. 2-3)
1985. 01. 00	評論	「絵本の世界から8 絵本のカラー—単色と多色(2)—」普及版こどものとも折り込みふろく「絵本のたのしみ」1985-1 福音館書店 (pp. 2-3)
1985. 02. 00	評論	「絵本の世界から9 絵本の文(1)—文も書く画家たち—」普及版こどものとも折り込みふろく「絵本のたのしみ」1985-2 福音館書店 (pp. 2-3)
1985. 03. 00	評論	「絵本の世界から10 絵本の文(2)—絵も描く作家たち—」普及版こどものとも折り込みふろく「絵本のたのしみ」1985-3 福音館書店 (pp. 2-3)
1988. 03. 30	翻訳	『よるのねこ』(傑作ねこの絵本) ダーロフ・イプカー文と絵、光吉夏弥訳 大日本図書
1988. 03. 30	翻訳	『のらねこボタン』(傑作ねこの絵本) トム・ロビンソン文、光吉夏弥訳、ペギー・ベイコン絵 大日本図書
1988. 03. 30	翻訳	『こねこのフェリーチェ』(傑作ねこの絵本) マーシャ・ブラウン文と絵、光吉夏弥訳 大日本図書
1988. 03. 30	翻訳	『かねもちのねことびんぼうなねこ』(傑作ねこの絵本) B・ウェーバー文と絵、光吉夏弥訳 大日本図書
1988. 03. 30	翻訳	『クリスマスのこねこ』(傑作ねこの絵本) クレア・ターレイ・ニューベリー文と絵、光吉夏弥訳 大日本図書
1989. 03. 15	翻訳	『世界むかし話 インド』光吉夏弥訳、畠中光享絵 ほるぷ出版
1989. 05. 24	翻訳	『ネコ 猫 ねこ—世界中のネコの昔ばなし』光吉夏弥訳・編 平凡社
1989. 07. 15	翻訳	『世界むかし話 東南アジア』光吉夏弥訳、テプシリ・スークソパ絵 ほるぷ出版
1989. 08. 25	翻訳	『世界むかし話 太平洋諸島』光吉夏弥訳、チャールズ・キーピング他絵 ほるぷ出版
1990. 01. 15	評論	『絵本図書館—世界の絵本作家たち』光吉夏弥著、ブック・グローブ社
1996. 11. 15	翻訳	『スズの兵隊』(大型絵本マーシャ・ブラウンの絵本) マーシャ・ブラウン作、光吉夏弥訳、岩波書店
1996. 11. 15	翻訳	『長ぐつをはいたネコ』(大型絵本マーシャ・ブラウンの絵本) マーシャ・ブラウン作、光吉夏弥訳、岩波書店
1998. 02. 16	翻訳	『ひとまねこざるときいろいろいぼうし』(改版・ひとまねこざるシリーズ全6冊セット) H. A. レイ文・絵、光吉夏弥訳 岩

		波書店
1998. 02. 16	翻訳	『ひとまねこざる』(改版・ひとまねこざるシリーズ全6冊セット)H.A.レイ文・絵、光吉夏弥訳 岩波書店
1998. 02. 16	翻訳	『じてんしゃにのるひとまねこざる』(改版・ひとまねこざるシリーズ全6冊セット)H.A.レイ文・絵、光吉夏弥訳 岩波書店
1998. 03. 05	翻訳	『ろけつとこざる』(改版・ひとまねこざるシリーズ全6冊セット)H.A.レイ文・絵、光吉夏弥訳 岩波書店
1998. 03. 05	翻訳	『たこをあげるひとまねこざる』(改版・ひとまねこざるシリーズ全6冊セット)マーガレット・レイ文、H.A.レイ絵、光吉夏弥訳岩波書店
1998. 03. 05	翻訳	『ひとまねこざるびょういんへいく』(改版・ひとまねこざるシリーズ全6冊セット)マーガレット・レイ文、H.A.レイ文・絵、光吉夏弥訳 岩波書店
1998. 03. 30	翻訳	『ガンピーさんのふなあそび』(音楽付絵本)ジョン・バーミンガム原作・光吉夏弥訳、坪能克裕音楽 ラボ教育センター
1998. 08. 25	翻訳	『みつばちじいさんのたび』(緑の原っぱシリーズ3)フランク・ストックトン作、モーリス・センダック絵、光吉夏弥訳 童話館出版
1999. 11. 15	翻訳	『ひとまねこざるときいろいぼうし』(オリジナル原画版)H.A.レイ作、光吉夏弥訳 岩波書店
2000. 10. 05	翻訳	『おおきいつりー ちいさいつりー』ロバート・バリー作、光吉夏弥訳 大日本図書
2005. 04. 15	翻訳	『ちびくろ・さんぼ』ヘレン・バンバーマン文、フランク・ドビアス絵、光吉夏弥訳 瑞雲舎
2005. 09. 10	翻訳	『ちびくろ・さんぼ2』ヘレン・バンナーマン文、岡部冬彦絵、光吉夏弥訳 瑞雲舎
2007. 05. 01	翻訳	「だんごをなくしたおばあさん」小泉八雲作、光吉夏弥訳 清重伸之絵 『10分で読める名作 三年生』学習研究社 (pp. 17-31)
2007. 11. 01	翻訳	『こねこのバベット』クレア・ターレイ・ニューベリー文と絵、光吉夏弥訳 ブッキング
2010. 02. 00	翻訳	『王さまのアイスクリーム』(ゆかいなゆかいなおはなし 新装版)フランセス・ステリット文、光吉夏弥訳、土方重巳絵 大日本図書
2010. 03. 00	翻訳	『わにのはいた』(ゆかいなゆかいなおはなし 新装版)マーガレット・ドリアン文と絵、光吉夏弥訳 大日本図書
2010. 03. 00	翻訳	『ちびっこ大せんしゅ』(ゆかいなゆかいなおはなし 新装版)シド・ホフ文と絵、光吉夏弥訳 大日本図書

以下は、全4期の業績数を表にまとめたものである。

表4 光吉業績数の各期比較表

	業績	翻訳	評論	その他
第Ⅰ期前期	14	6	8	0
第Ⅰ期後期	49	38	3	8
第Ⅱ期	68	59	5	4
第Ⅲ期	195	75	116	4
(計)	326	178	132	16

- 1 『ひとまねこざる』 H.A.レイ作・光吉夏弥訳〈岩波の子どもの本〉岩波書店 1954年12月
- 2 頼山陽『日本外史』
- 3 伊藤元雄「あとがきにかえて」『絵本図書館—世界の絵本作家たち』ブック・グローブ社 1990年 (pp.176-177)
- 4 前掲書3

第2章 第1期前期—戦中 児童文化統制期 (1942~1945年)

1. 翻訳

『花と牛』(1942)・『フタゴノ象ノ子』(1942)

① 児童文化統制期におけるアメリカ絵本の翻訳

1942年に筑摩書房から〈世界傑作絵本〉シリーズとして『花と牛』(図1)、『フタゴノ象ノ子』(図2)の2冊を翻訳出版された。2冊とも光吉が翻訳を手掛けている。選書の段階から関わったのではないかと推測される。

当時は戦争の最中だったこともあり、海外の絵本を入手することは困難だった。にもかかわらず、光吉はこの頃から趣味で絵本を含む海外の児童書を多数蒐集しはじめていた。海外絵本の原書を提供できる立場であったこと、そして新聞社での編集経験もあったことから、選書にはじまり編集まで関わったと考えられる。さらに翻訳に関しても、光吉は一家言を有する人物であった。この2冊の翻訳絵本の出版には、光吉の個人的な意図が尊重され、選書と編集・翻訳を一任されたのであろう。

戦時下に翻訳された2冊の翻訳絵本の出版と翻訳の方法について、考察を行う。

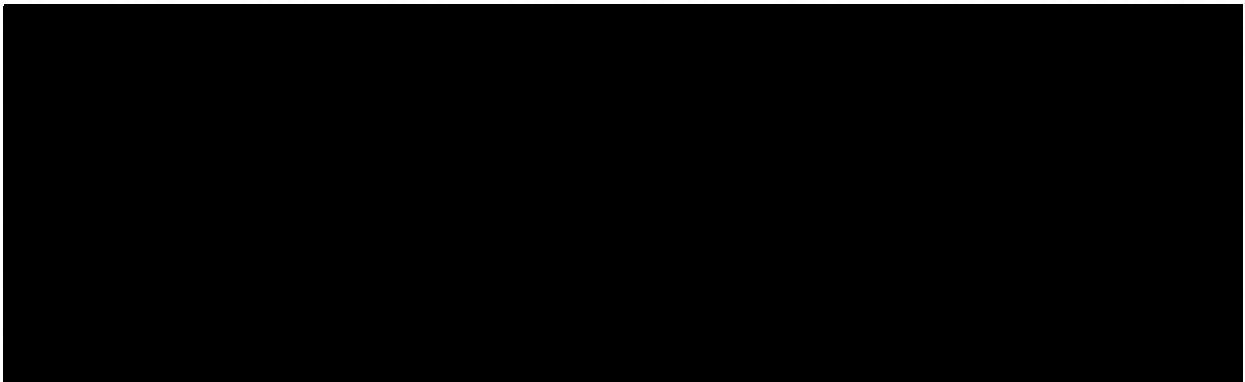


図1 『花と牛』

図2 『フタゴノ象ノ子』

『花と牛』〈世界傑作絵本〉
ムンロー・リーフ作、ロバート・ロウソン画
光吉夏弥訳 筑摩書房 1942年

『フタゴノ象ノ子』〈世界傑作絵本〉
ホーガン作
光吉夏弥訳 筑摩書房 1942年

時代背景を振り返ってみると、これらの翻訳絵本が出版される1942年の前年には太平洋戦争がはじまっている。この時期に、敵国アメリカの絵本を翻訳できたことは驚くべき事実である。

児童文学者の瀬田貞二は、この2冊の翻訳絵本について以下のように評している¹。

「戦争は急速に進み、外国文の使用そのものも不可能になっていった。そのなかで、清らかな奇蹟に近い出版物は、光吉夏弥が新興の筑摩書房によって企画した「世界傑作絵本」の三冊²であった。(筆者中略)わが国ではまれな、美しい絵本、絵本物語の世界を登場せしめた」

この2冊の翻訳絵本の出版元の筑摩書房は、1940年に中野重治の作品の刊行を以て出版を始めた新しい出版社であった。社長の古田晃は、この時期にあっても時局にとらわれずに、良質な出版物を世に出そうという考えを持っていたという³。この社長の考えもあって、子どものための翻訳絵本〈世界傑作絵本〉シリーズが刊行された。

石川晴子によると⁴、「世界傑作絵本シリーズ」として刊行された『花と牛』と『フタゴノ象ノ子』の二冊は、後に瀬田貞二氏をして「清らかな奇蹟に近い出版物」といわしめた絵本であった。いずれも縦書き右開きのほかは、アメリカで出版された原書を尊重して頁の構成などを変えずに日本語版を作ったという。

さらに、石川は『花と牛』の評価を以下のように述べている⁵。

闘牛場で闘わずに花の香りをかいでいた、力は強いけれど花を愛する心優しいフェルジナンドを、リーフは淡々とした口調で出来事を連ねて語り、ローソンは黒一色のエッチングの線で表情豊かに描く。ユーモアあふれる絵本は、出版されるやアメリカでベストセラーとなったのをはじめとし、世界の各地で出版されたが、ドイツではナチスによる焚書の対象にもなった。

戦火が激しくなるなか、海外の翻訳絵本、とくに敵国であるアメリカの絵本を翻訳することだけでも危険視されていたはずである。この時期が日米戦争下であったこと、さらに絵本に描かれている内容からも、この2冊の翻訳絵本が国内での検閲をパスしたことは、運が良かったとしか言いようがない。時代は日米戦争まっただ中であり、児童文化も統制下におかれていた事情からか、やはり〈世界傑作絵本〉シリーズは2冊だけで中断していることも見逃せない事実である。

鳥越信は岩波書店〈子どもの本〉の編集で光吉とともに仕事をした人物であるが、筑摩書房〈世界傑作絵本〉の『花と牛』について、以下のように述べている⁶。

一九四二年にはアメリカの絵本、リーフの『花と牛』、ホーガンの『フタゴノ象ノ子』が、日本でも翻訳・出版されていたのだが、私は子ども時代にこれらの絵本と出会うチャンスがなかった。しかも、筑摩書房から出版された二冊のアメリカ絵本は、いずれも光吉さんの訳で、海外のすぐれた絵本を日本に紹介したいという光吉さんの熱い思いが、この企画を生んだのだった。けれどもその前の年にアメリカと戦争をはじめた日本の当時の状況では、敵国の絵本の翻訳などはとんでもないことで、まして闘牛士と戦うことよりも花が好き、という『花と牛』に至っては、一種の反戦絵本とも解釈されたから、けっきょくこの企画は二冊だけで中断された。

実際にも光吉は戦後、『花と牛』は物語の内容からも反戦的との評価を受けたと以下のように述懐している⁷。その述懐は、戦後に光吉がアメリカの子どもの本のベストセラーを解説する文章のなかで、筑摩書房の『花と牛』の出版を振り返ったものである。

日本でといえば、この書の訳本を出したとき、僕は当時の出版協会のある人から、ある会合でこの書が反戦的だという非難をうけたものだった。アメリカはむろん、世界じゅうの、大きい読者も小さい読者も、すべてがこの本のヒューモアを大らかに楽しんでたなかに、日本でだけそうした案外な批判がなされたことは、やはり敗ける国の誤られた良識の、ひとつの現れだったとして、いま悲しく思い出されるのである。

この翻訳絵本シリーズの企画が中断された原因が、この述懐によっではっきりわかるわけではない。しかし、絵本『花と牛』に反戦的内容がみられたことが、シリーズ中断の引き金になった可能性は否定できないことがうかがえる。児童文学が統制下にあり、国内の状況も厳しさを増していく状況であった。結局、〈世界傑作絵本〉シリーズは2冊しか出版されないまま、その企画は頓挫してしまう。戦争に翻弄された翻訳絵本シリーズと称しても過言ではあるまい。児童文化統制の実態については、第2章第3節において詳細を後述する。

作品の奥付には出版統制のなか、紙の配給があったことがうかがえる。「配給元」「配給所」等の表示がある。会員番号は印刷用紙の配給に必要な、登録番号である。以下、2冊の奥付を示す。(奥付中の波下線は筆者による)

[『花と牛』奥付]

昭和十七年二月二十日 印刷

昭和十七年二月廿五日 発行

[花と牛]

編者 光吉夏彌 (みつよしなつや)

発行者 東京市京橋区銀座西六の四 古田晁

印刷者 東京市京橋区銀座八の二 塚本閣治

印刷所 東京市京橋区銀座八の二 塚本印刷株式会社

配給元 東京市神田区淡路町二の九 日本印刷配給株式会社

発行所 筑摩書房

東京市京橋銀座西六の四

振替口座東京一六五七六八

電話銀座 (75) 二〇五六番

会員番号 一一七〇二五 長谷部製本所

金壱円

[『フタゴノ象ノ子』奥付]

昭和十七年二月二十日 印刷

昭和十七年二月廿五日 発行

フタゴノ象 (ザウ) ノ子 (コ)

編者 光吉夏彌 (みつよしなつや)

発行者 東京市京橋区銀座西六の四 古田晁

印刷者 東京市神田区小川町一ノ十一 織部喜久治

印刷所 東京市神田区小川町一ノ一一 官本印刷所

配給所 東京市神田区淡路町二ノ九 日本印刷配給株式会社

発行所 筑摩書房

東京市京橋銀座西六の四
振替東京一六五七六八
電話銀座二〇五六番
会員番号 一一、七〇二五 三快堂製本
金八〇銭

② 海外オリジナル絵本の翻訳

『花と牛』、『フタゴノ象ノ子』は、海外オリジナル絵本の翻訳である。「海外オリジナル絵本」とは、海外で絵本として出版されたものを指す。海外オリジナル絵本とは別に、一方では、もともと海外で生まれた物語（昔話や民話を含む）をもとに日本人の翻訳者が再話や翻訳・翻案をし、日本人の画家が絵を描き、絵本化されたものがある。これらも翻訳絵本というジャンルのなかにあっても、翻訳の方法が異なることから、海外オリジナル絵本とは分けて考えることとする。

『花と牛』、『フタゴノ象ノ子』では、絵が文章（言葉）と同等に働き、物語を展開するのである。そこでは、絵は文章表現の単なるおまけの挿絵としてではなく、物語を成り立たせる独立した要素となる。絵と文章（言葉）が有機的に相互作用して、物語を展開させる絵本が日本に移植された。この二冊の絵本は、絵と言葉が有機的に相互作用して物語を展開していく、新しい絵本のタイプを具体的に示していた。光吉は「絵と言葉によって物語が展開される」という絵本表現の独自性を見出し、日本にはじめてもたらしたのである。

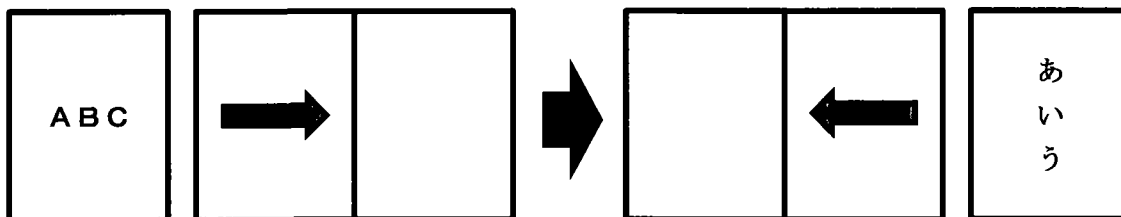
③ 絵本翻訳の方法—“左開き横組み”から“右開き縦組み”へ

ここで明確にしておかなければならないのは、「絵本の翻訳」という言葉の定義についてである。「絵本の翻訳」には、通常の書籍における編集とは少し異なった工程が含まれている。現代では日本語が横書きになっていても、全く違和感はない。しかし当時は「日本語は縦書き」が通常であったため、翻訳の際には、海外絵本の“左開き横組み”になっている原書を、“右開き縦組み”に再構成しなければならなかった。ただ外国語を日本語に翻訳するばかりでなく、“左開き横組み”である海外絵本の原書を、“右開き縦組み”に組み直す作業が必要になるのである。光吉は戦後の〈岩波の子どもの本〉編集・翻訳に際してさえも、以下のように述べ、⁸“左開き横組み”である海外絵本の原書を、“右開き縦組み”に組み直す必要性を指摘している。

その後、原本どおり、左開きヨコ組みのほうが、原本に忠実であるかのように思う傾向が翻訳絵本の出版に見られたが、オールひらがな、わかち書きのヨコ組みは、なんとしても読みづらいし、欧文文字とひらがな活字とでは、いくら同じヨコ組みでも、タイポグラフィはまるきり別のものになってしまうのだから、私はやはり、右開き、タテ組みに再編集して、子どもたちに読みやすいたちで提供するほうが親切だと思っている。

横書きの外国語を縦書きの日本語にする際に、絵本には文章だけでなく絵があることから、絵本翻訳にはさらに大きなむずかしさが伴う。このむずかしさは、絵本のもつ視覚表現という特質に起因している。絵本の絵は、文章と同じく、物語を語る役割を担っ

ている。さらに絵本の絵は、表紙から裏表紙へと続く連続性を持っている。この連続性は、物語の進行方向と言い換えてもよい。絵本において、絵の連続性は1冊の絵本が物語世界として成り立つ大きな要素となる。「絵本の翻訳」の際には、その絵本の持つ視覚表現としての展開を損なわずに、連続性、進行方向を右方向から左方向に再構成する必要がある。



ここで、原書の右方向の流れを左方向へ変えるため、技術的な作業としては、絵を逆版にしたり、絵を分解して再構成したり、絵を描き加えてレタッチする等の作業が生じてくる。海外絵本が原書どおり“左開き横組み”のまま翻訳されるようになる1970年代まで、海外絵本の翻訳には組み直しの作業が必要だったのである。

上記のような理由から、本研究で「絵本の翻訳」というとき、翻訳の作業に加えて、実質上、編集の作業も含むものとする。「絵本の翻訳」には、「何を翻訳するのか」という選書、「どのように翻訳するのか」という編集、純粋に外国語を日本語に訳す翻訳、この3つの作業が未分化であり、その作業や工程の複雑さもあいまって、これらすべてが翻訳者に委ねられていたのである。

戦後においてさえも、〈岩波の子どもの本〉のシリーズに含まれる海外絵本の翻訳の際、同じように選書や組み直し作業、翻訳等の作業を光吉が負うところが多かったことから、この筑摩書房の〈世界傑作絵本〉2冊も、選書から編集、翻訳まで全てが光吉に任されていたと推測される。

絵本の翻訳方法という点において、光吉は、海外オリジナル絵本を『花と牛』、『フタゴノ象ノ子』にどのように翻訳していくのか試行錯誤を重ね、独自の方法を編み出している。以下に、原書 *The Story of FERDINAND* と『花と牛』を比較して、その翻訳の方法を検討する。

④ *The Story of FERDINAND* の特徴

『花と牛』の原書は、アメリカ絵本の *The Story of FERDINAND* である。1936年にアメリカで出版されてから、ディズニーが映画化したり、さまざまなキャラクターグッズが発売されたりとベストセラーとなった。日本での翻訳は、光吉による1942年の『花と牛』、1954年『はなのすきなうし』の2種がある。『はなのすきなうし』は戦後1954年、岩波書店から出された〈岩波の子どもの本〉の1冊として翻訳された。つまり、同じ絵本から2種類の翻訳本が出ているというわけである。

The Story of FERDINAND
The Viking Press 1936

『花と牛』
〈世界傑作絵本〉
光吉夏弥訳
筑摩書房 1942

『はなのすきなうし』
〈岩波の子どもの本〉
光吉夏弥訳
岩波書店 1954

The Story of FERDINAND (光吉文庫所蔵 M05918)

By Munro Leaf Illustrated by Robert Lawson The Viking Press 1936
(21センチ×17.5センチ)

『花と牛』〈世界傑作絵本〉 (神奈川近代文学館所蔵)

ムンロー・リーフ作 ロバート・ロウソンが 光吉夏弥訳 筑摩書房 1942
(17.8センチ×22.5センチ)

『はなのすきなうし』〈岩波の子どもの本〉初版 (大阪国際児童文学館所蔵)

おはなし マンロー・リーフえ ロバート・ローソン 岩波書店編集 (後に光吉夏弥訳) 1954
(20.6センチ×16.5センチ)

この絵本を翻訳した背景には、作品の物語性も深くかかわっているため、まずは作品のあらすじを説明する。

[作品のあらすじ]

スペインのある牧場に、フェルジナンドという仔牛がすんでいた。ほかの仔牛たちは闘牛のあばれ牛になるのを夢見ているが、フェルジナンドはそんなことには全く興味がない。フェルジナンドは何よりも牧場のコルクの木の日陰で、のんびりと匂いを愉しむのが好きだった。彼は日に日に成長し、ついに立派な大きな牛になる。ある日、牛買いの男たちが闘牛のあばれ牛を選びに牧場にやってきた。フェルジナンドがたまたま蜂に刺されて、痛みで大暴れしているところに、牛買いたちが出くわし、フェルジナンドはその暴れぶりを見込まれ、闘牛場に連れて行かれてしまう。ついに闘牛が始まろうとしたそのとき、フェルジナンドは見物の婦人たちの帽子についている花の香りにうっとりして座り込み、動かなくなる。観衆はがっかり、闘牛士たちは見せ場がないと大いに怒る。このあとフェルジナンドは牧場へと戻されて、とても幸せに暮らす。

この絵本の特徴としては、「物語を語る絵」が挙げられる。当時、日本の絵本においては、絵は文章の添え物の域を出ないものがほとんどであった。しかし *The Story of FERDINAND* で

は、絵は文章が語っていないことを補完的に語り、それぞれの登場人物（動物）の特徴をイメージさせ、ユーモアあふれる表現力を持っている。絵が文章と相互補完的に働き、有機的関係にあるといえる。絵本における絵と文章の関係という点で、やはり斬新な表現を持つ絵本である。

光吉はロバート・ローソンをよほど高く評価しているとみえて、戦後の評論で2度にわたって、この画家を取り上げている。ひとつは『月刊絵本』第3巻第10号の「絵本の世界14 ロバート・ローソン」（すばる書房盛光社 1975年10月（pp.58-62））であり、もうひとつは、『子どもの館』の「絵本の世界から—その文献と資料⑩ 子どもにはすべてをロバート・ローソン」（福音館書店 1975年5月）においてである。

⑤ 『花と牛』における絵本翻訳

『花と牛』がどのような方法で翻訳されたかを検討するため、原書と翻訳本の絵と訳文を比較した。比較の結果、光吉は戦中の1942年の時点で、原書の物語の展開を支える絵の進行方向を尊重し、“左開き横組み”から“右開き縦組み”にする際に、「裏ヤキ」、つまり逆版印刷を施し、原書のデザインを翻訳絵本へと再構築していたことが明らかになった。

比較の対象としたのは、原書 *The Story of FERDINAND* と、『花と牛』である。光吉文庫には *The Story of FERDINAND* が6冊（ハードカバー、ペーパーバック）あることが確認できた。筆者が数年前に光吉文庫を訪れた際、一緒に来訪した児童文学研究者の石川晴子氏が、その原書のうち1冊に鉛筆の書き込みがあることを発見した。筆者は書き込みのある原書は『花と牛』か『はなのすきなうし』、このうちどちらかの底本であると予測した。

比較に際して原書、翻訳本を入手するために予備調査を行った。その予備調査の段階で、光吉文庫には『花と牛』が所蔵されておらず、国内では神奈川近代文学館に1冊所蔵があるのみだということが分かった。光吉文庫の書き込みのある原書 *The Story of FERDINAND* (M05918) と、近代文学館の『花と牛』、大阪国際児童文学館の『はなのすきなうし』初版本を比較してみた。その結果、*The Story of FERDINAND* (M05918) は、『花と牛』の底本であることが明らかとなった。その根拠は、原書 *The Story of FERDINAND* (M05918) への書き込みの指定サイズや「裏ヤキ」（逆版指定）等の指定事項は、『花と牛』の造本に一致することである。

次に、原書 *The Story of FERDINAND* と『花と牛』比較を行い、翻訳の方法を検討する。*The Story of FERDINAND* は、見開き⁹に絵のみのページ、文章のみのページが配置されている。それに対して『花と牛』は、原書の見開きにあたる左右2ページ分を1ページに配置している。つまり『花と牛』のページ数は、原書 *The Story of FERDINAND* の約半分になる。下記の図3は *The Story of FERDINAND* の見開き、図4は『花と牛』の見開きである。



図3 *The Story of FERDINAND*

図4 『花と牛』

次に、光吉文庫所蔵の *The Story of FERDINAND* (M05918) に発見された書き込みを検討する。書き込みのあったのは33ページ、41カ所であった。内訳は、①寸法を指定するもの(3カ所)、②ページ数(31カ所)、③逆版印刷を指定するもの「裏ヤキ」(7カ所)である。それぞれ代表的な書き込みと、翻訳絵本『花と牛』へ反映された該当箇所を対照した結果が、以下の図5.6.7である。

①寸法を指定するもの：図5、図6

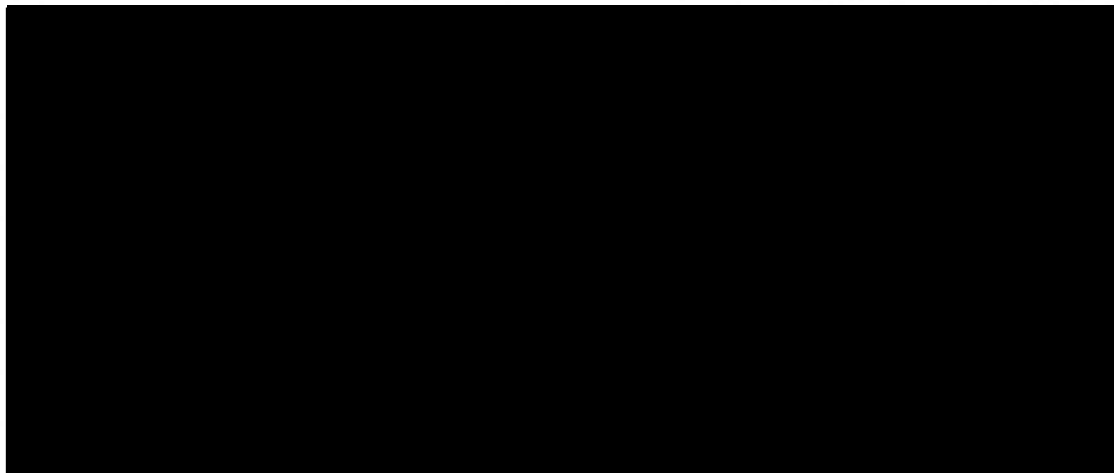


図5 扉ページ書き込み「原寸」(縦書き)



図6 P.1 書き込み「全部之寸法←天地6寸→」(縦書き)
「天地 6寸2分×5寸1分 左右」(横書き)

②ページ数、③逆版印刷を指定するもの「裏ヤキ」 図7

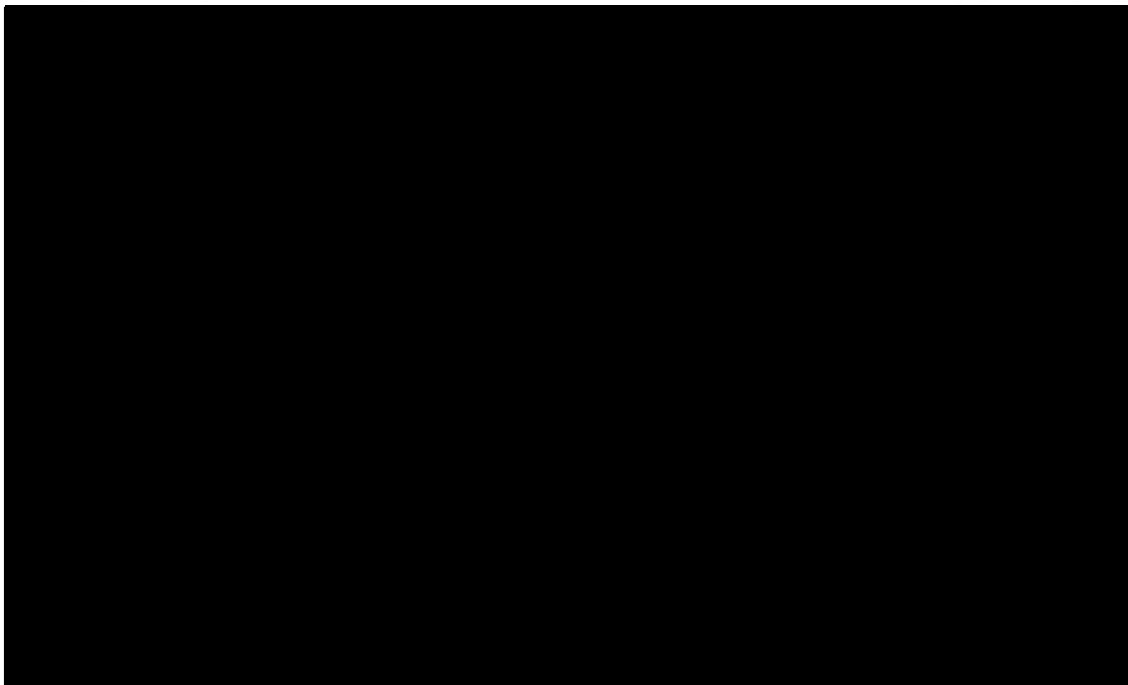


図7 P.3 書き込み「②裏ヤキ」(縦書き)

以上のように、原書 *The Story of FERDINAND* (M05918) にある全ての書き込みを、『花と牛』の該当箇所と照合させた結果、全てが反映されていた。

『花と牛』は絵の部分の背景を黄色にしており、黄色背景の絵の部分の寸法を確認したところ、天地が17.8センチ、左右が14.5センチであった。1寸を3.03センチとすると、原書の書き込み指定「天地6寸2分」は18.786センチ、左右5寸1分は15.453センチであり、ほぼ同じ長さとなる。

「裏ヤキ」つまり逆版印刷の指定箇所も、全て反映されている。なお、*The Story of FERDINAND* (M05918) の絵は 40 箇所（表紙・裏表紙、表・裏見返し、扉絵 1 箇所含む）あり、このうち『花と牛』で逆版印刷されているのは 8 箇所であった。このうち、扉絵 1 箇所は、「裏ヤキ」との書き込みはないが、物語の進行方向に合わせて逆版印刷がなされている。

光吉の『花と牛』での絵本翻訳の方法において、筆者が最も注目するのは、逆版印刷の箇所が、どのような根拠に基づいて「裏ヤキ」指定されたのかということである。そもそも、なぜ絵本にある全ての絵ではなく、数ヶ所のみを逆版指定しているのか。「裏ヤキ」指定された箇所を翻訳絵本と照らし合わせてみたところ、興味深い事実が明らかになった。

光吉は、比較絵本を翻訳する際に、原書の物語展開や絵の進行方向を鑑み、逆版指定しているのである。以下の図 8. 9. 10. 11 は、原書の「裏ヤキ」指定箇所と、『花と牛』該当箇所を照合したものである。この図を参照しながら、「裏ヤキ」の意味について述べる。

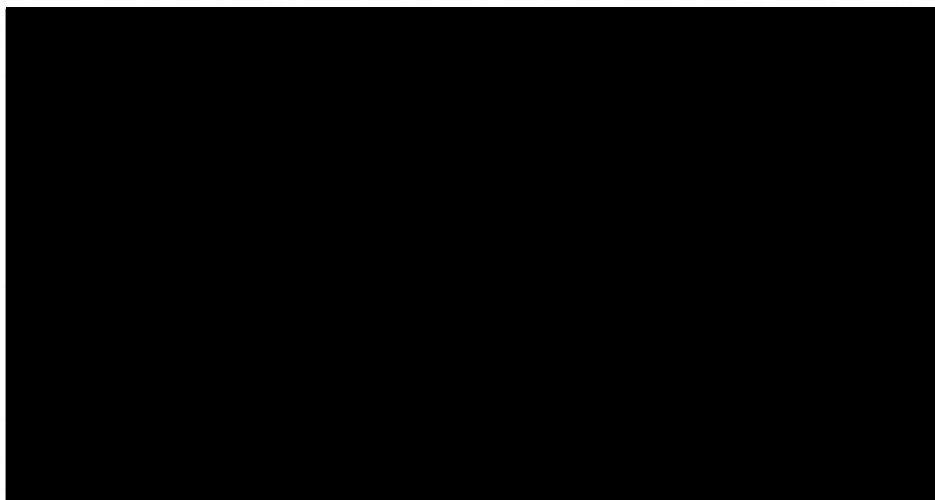


図 8 「裏ヤキ」指定箇所 (1)

図 8 では、物語の冒頭で、ある牧場にフェルジナンドという仔牛がいるという紹介の部分である。読者の子どもにとっては、物語がいよいよ始まるとも楽しみな場面である。原書では、仔牛の頭が向いている右方向に物語が進んでいくが、これを“右開き縦書き”にすると、進行方向が逆になる。絵本の進行方向に合わせて、子どもの視線も移っていくことを考え合わせると、絵本の視覚表現上、絵の進行方向は重要な要素になることはまちがいない。仔牛の向きを物語の進行方向に合わせるために、光吉はこの箇所を「裏ヤキ」指定していると考えられる。

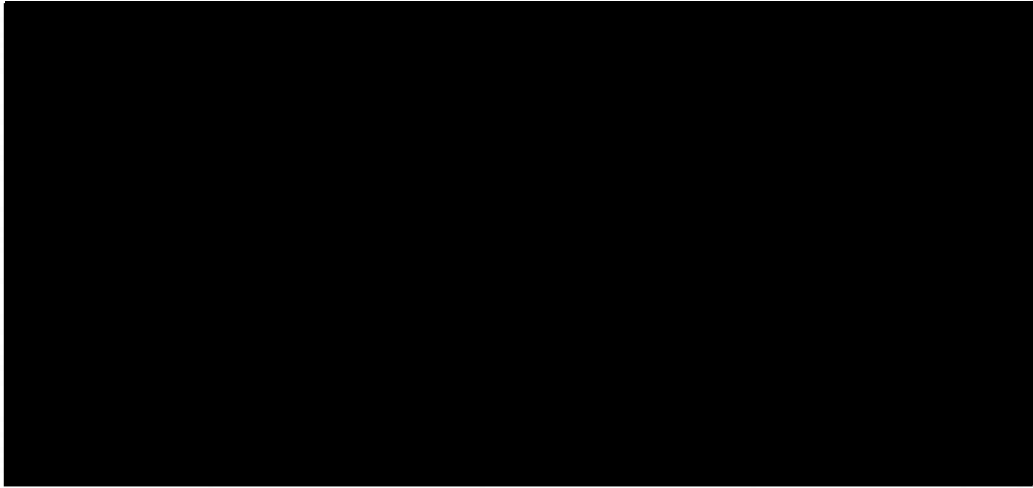


図9 「裏ヤキ」指定箇所 (2)

図9は、仔牛フェルジナンドが、大好きなコルクの木の下に歩いて向かう絵である。この箇所も図8と同様、仔牛の進行方向を、物語の展開を考慮したうえで、絵の進行方向に合わせるために、「裏ヤキ」指定したものと考えられる。例えば、この場面が逆版印刷されなかったらと仮定してみると、視線の流れを妨げる場所にフェルジナンドが位置し、しかも絵の進行方向とは逆方向に向かう仔牛が描かれていて、子ども読者は混乱してしまうだろう。

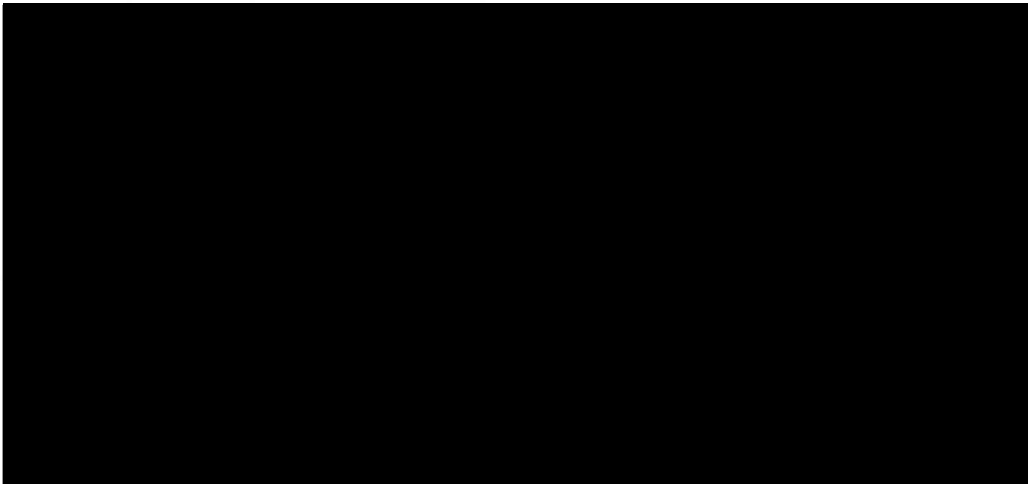


図10 「裏ヤキ」指定箇所 (3)

図10はフェルジナンドが臀部を蜂に刺されて跳び上がる場面であるが、牛の足のみをクローズアップし、その勢いを躍動感たっぷりに描いている。ここには牛のからだは描かれてはいないが、跳び上がる進行方向、翻訳本の進行と合わせるために、逆版の方法を採っている。

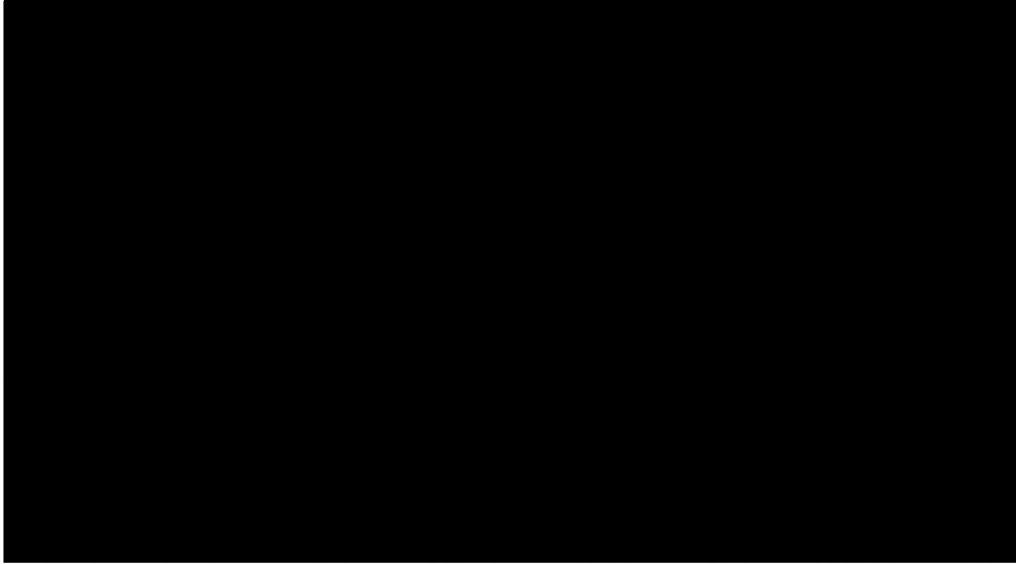


図 11 「裏ヤキ」指定箇所 (4)

図 11 は、原書において物語の進行方向とは逆向きに牛が跳び上がっている場面である。絵本の絵に描かれた登場人物は進行方向ばかり向いているわけではなく、ここのように、痛さや驚きを表現するために、敢えて進行方向とは逆向きで表現されている。原書におけるその効果を翻訳本においても生かすために、逆版がほどこされている。

⑥ 原書と翻訳絵本の比較結果の考察

以上、図 8 から図 11 まで「裏ヤキ」指定箇所の検討と考察からは、光吉が原作者の描いた絵の意味と効果を十分理解したうえで、子ども読者の解釈や読み心地のよさに配慮して編集していることが分かる。つまり、光吉がただ外国語を日本語に訳すのではなく、独自の絵本観と子どもの理解のうえに、細やかな配慮を施しながら絵本を翻訳しているのである。ここにみえてくるのは、絵本を文章表現のみではなく、視覚表現としてもとらえる、当時としてはめずらしい絵本観である。

本研究で行った『花と牛』における絵本翻訳の方法の調査は、絵本翻訳における逆版が既に〈岩波の子どもの本〉以前に行われていたことを発見できたという意味で、大きな意義がある。なぜならば、これまでの絵本史研究においては、翻訳の際に絵を逆版にするという手法は〈岩波の子どもの本〉からはじまったと考えられてきたからである。光吉は〈岩波の子どもの本〉以前の『花と牛』において、既に絵本の絵の進行方向を尊重した逆版という手法を採り入れていたのである。〈岩波の子どもの本〉の逆版の詳細とその功罪については第 4 章で述べることとする。

この調査を進めていくにあたり、戦中に翻訳された絵本の底本が見つかったことは、かえすがえすも幸運であったといえる。絵本は、子どものおもちゃと同様、市場に出回ったものは消耗品として扱われ、子どもが親しむうちに原形をとどめないほど破損してしまう。この時代の絵本が資料として保管されていることは、光吉文庫のようなまれなケース以外にはまずありえない。光吉の蔵書が適切に保管されていたからこそ、戦中の翻訳絵本における翻訳方法の調査が可能であった。

⑦ 光吉の前文にみられる子ども観・絵本観

光吉はこの2冊の翻訳絵本に前文を書いている。冒頭には、この翻訳絵本シリーズの説明を以下のように述べる。

「子供が最初に絵に親しむのは絵本によつてであり、事実、絵本は絵画を与へる唯一の機関でさへあります。従つてよい絵本は国民の幼いときからの美に対する正しい意識を培ふうへに、基礎的な重要性を持つものといはなければなりません。この点に深く鑑みるところあつて、こゝに現代最高の作品を選定して「世界傑作絵本集」を編むことになりました。」

ここには、絵本を幼い人たちの美に対する意識を育む、ひとつの芸術の形態としてとらえる絵本観があらわれている。

『花と牛』の前文では、この絵本の画家、ロウソンの紹介を、「いはゆる「子供のため」に描くといふ、限られた嗜好と限られた理解を対象とする、絵本画家の陥り易い誤りを排撃して、あくまでも本格的な純粋なものを、正しく誠実に提供することを本志とする画家」といい、また作品を「真の美と暖かさと、生きた性格と純真なユーモアを欠いて児童の絵本はありえないといふロウソンの主張を、一点一線にまで代表するのが本書であります。」と高く評価している。

『フタゴノ象ノ子』の前文では、絵本の作者のホーガンについて、「ホーガンの絵には子供に押しついたり、また意識的に興味をかりたてようとする要素もなく、あくまでも自然に、あたたかく、子どもの心に訴へようとするものであります。(中略)この話のもつ純真なたのしさは、ホーガンの子供の心に対する健全な理解をかたるものといはなければなりません。」と述べ、作家と作品の評価を附している。

これらの前文に示された光吉の子ども観、絵本観は、児童文化統制期であった時代背景に鑑みれば、斬新なものと言わざるを得ない。一步間違えれば、反戦的、時局に反すると非難されかねないほどの自由さである。当時、国家総動員の旗のもとに、子どもは少国民と呼ばれ、戦力の一資源として鍛錬する対象としか見られていなかった。この時期に、光吉がこのように自由闊達な子ども観、絵本観を持っていたことは驚くべきことである。2冊の絵本の前文にあらわされた光吉の絵本観は、同じ時期に書かれた評論「絵本の世界」(本論第2章第2節で考察)に通じている。

2. 評論

(1) 「翻訳者の反省」『少国民文化』（1943年）

① 『少国民文化』誌掲載「翻訳者の反省」

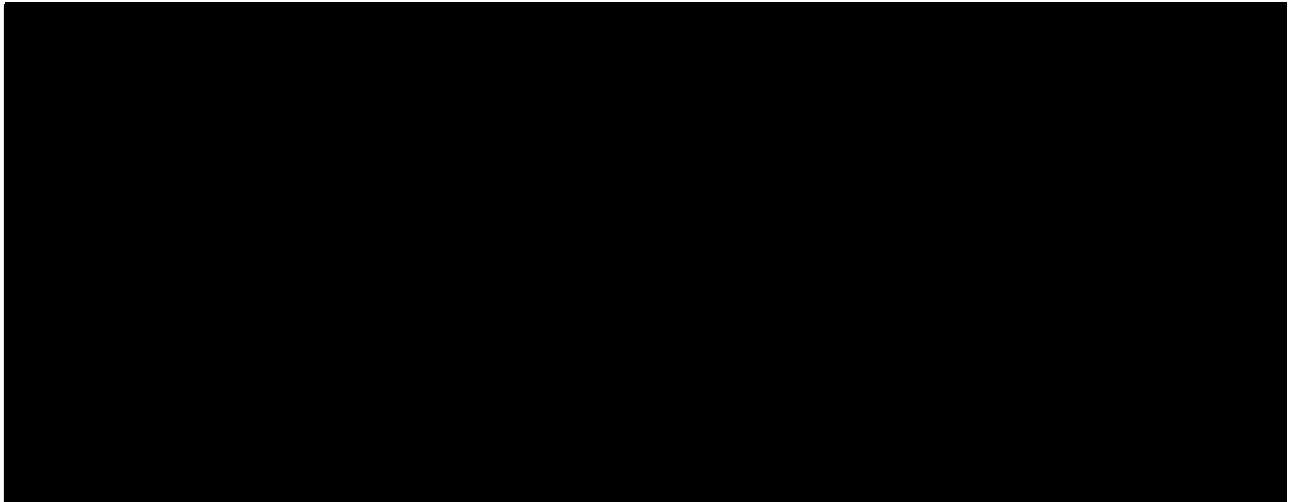


図12 『小国民文化』表紙 と 「翻訳者の反省」見開き

「翻訳者の反省」『少国民文化』日本少国民文化協会 1943年1月

戦火の激しくなった日本では、戦争遂行のために銃後の児童文化においても統制が行われた。この児童文化統制は「上からの強権的な押しつけの形はとらず、学識経験者などの意見を尊重するポーズ」¹⁰を取るという極めて巧妙な方法で行われた。また皮肉なことに、この統制のおかげで芸術的かつ良心的な児童文学に用紙の割り当てが与えられたため、統制期にもかかわらず児童文学における「復興現象」を引き起こした。統制の指揮を執っていた団体が、日本少国民文化協会という組織である。光吉はこの日本少国民文化協会の文学部会幹事のひとりとしてこの統制に加わっていた。いわば統制の当事者と言っても過言ではない。

「翻訳者の反省」（図12）の掲載されている『少国民文化』は、日本少国民文化協会のプロパガンダ誌であった。光吉はこの雑誌において児童文学の翻訳、子どもの舞踊、児童文学・絵本についての評論を数々発表している。「翻訳者の反省」は1943年新年号に載ったものであるが、当時の児童書翻訳に一石を投じる評論であった。光吉は「翻訳者の反省」のなかで、児童書の翻訳のあり方と翻訳者の役割について論じている。以下に、評論の内容を検討してみる。

② 情報収集・整理の分類カードについて

「僕は自分の参考のために、明治以来の海外の児童読物の翻訳年表と、作者別の作品カードを作つてゐる。」とあるように、それぞれの作品に「どういふ作家の、どういふ作品が、いつの時代にどういふ風に移植されたか、さらに今どうなつてゐるかなど」を記した独自の資料を作成していた。分類カードに作家、作品はもちろんのこと、その作家・作品に関する評論がどの雑誌や単行本に載っているかなども記載している。一人の作家

の分類カードを見れば、その作家の全作品リスト、それらの書誌事項、その作家と作品に誰がどのような評論をどこに書いているか、全ての情報が即座にわかるほどの徹底ぶりであった。この分類カードについては、5.2において詳細を述べることとする。

③ 児童書翻訳のあり方への批判

光吉はこの論考で、今日までの海外児童文学のあり方を振り返って、「いちばん痛感されることは、児童分野における外国文学の摂取が、これまで体系も秩序もなく、あまりに恣意的になされてきたといふ」実態を痛烈に批判している。わが国において有象無象に翻訳紹介されている出版状況を「放恣な無秩序さが顕著に見出される」と指摘する。「児童文学の世界における海外物のかうした無体系的な移植」の原因は、「第一に海外の児童文学の文学史的な研究と、その世界文学的な把握が欠けていること」だと主張している。この「基礎的な知識が出版社はもちろん翻訳者にも十分に用意されてみなかったために、ただ漫然と放恣な翻訳活動がつけられてきたのだらう」という。そのためには、「訳される作品のいちく(2文字分のおどり字)の世界文学的な位置がはつきりつきとめられなければならないし、それにもましてそれが今日の日本の児童に対して持つ適確性が厳密に検討されなければならない。」と提言する。海外児童文学作品の世界文学的評価をふまえた上で、さらに現在の日本の子どもたちに適切な質を備えているのかを吟味すべきだということである。

④ 児童書翻訳の課題と展望

「また事実、この一年は、誰もが外国文学の移植といふことがどうなっていくのか、また何を訳してよいのかを思ひ迷つてゐたために、児童図書のかつてない氾濫にもかかわらず、翻訳書は実に数へるほどの少数しか世に送られなかつた。」という文章からは、時局柄、英語圏の翻訳は困難だったこともうかがえる。ただし、「米英の作家のものでも全面的にいけないといふのでないことははつきりしたのであるから、時代に合った積極的な翻訳活動が太い息吹をもつてははじめらるべきではないかと思ふ。」と時局に合う翻訳に希望を見出している。

日本の植民地政策に呼応するように、「支那を知らしめる仕事にしても、訳さるべき本は多数にあるし、共栄圏を知らしめる良書もたくさんある。」といい、アメリカの植民地政策としての出版に関しても見習うべきだとする。アジア諸国、ドイツ、イタリア、スペイン、ルーマニアなどの作家・作品や民話を挙げて、世界中のすぐれた児童文学を日本の子どもに手渡す夢を語っている。

さらに、国の政策と児童書の出版の連関について、「アメリカの児童出版界に大きな流れとなつたものは、中・南米ものの連続出版であつた。これは指摘するまでもなくアメリカの中南米親善政策に対応したものである。こんな工合でアメリカでさへが、国の動きと共に児童出版界も動いてゐるのだ。新しい東亜の建設のために、次代を背負ふ少国民に、南を知らせ大陸に親しませることが、明日の日本を築く大きな礎石の一つであることを思ふとき、われく(2文字分のおどり字)は組織立つた活動によつて協力に時代の要請に応へなければならない。」と述べ、植民地政策に沿った児童書翻訳のあり方を説いている。続けて、「支那や南や枢軸国に対して、日本の児童文学を紹介する仕事もやはり翻訳部門の人々がやらなければならない仕事でありやることはいつぱいある。英米的なものがしめ出しをくらつたからとて、われく(2文字分のおどり字)は青い吐息をついて

あることはないのである。」と、戦時下において英米の翻訳が出来なくなっても、その他の文化圏にもすぐれたものが多く、なすべきことは山積していることをと指摘した。

敵対国であるかないかには関わらず、国全体の動きとして諸外国の文化の理解を正確に行わずして、翻訳の仕事は成り立たないと異文化理解の根幹にかかわる見解を述べている。「もとより僕は、これらの仕事を最初にいつた無秩序な翻訳界を体系づける全部だとして挙げるのではない。」と啓蒙的な意味を付与された児童書翻訳ばかりではなく、「文学の領域は広いし、児童の読物は出来るだけ広汎に、豊富な種類において与へられなければならない。」とも述べている。評論のさいごでは、東洋関係の児童書の優秀さを評価して翻訳がなされること、それに加えて日本の児童文学を諸外国に紹介する仕事も翻訳家の務めであると山積みの課題を提示している。戦時下においても光吉が、翻訳家として強い意気込みを持っていたことをうかがわせる評論である。

⑤ 「翻訳者の反省」内容の考察

1943年1月に発表された「翻訳者の反省」からは、約1年前の筑摩書房の『花と牛』と『フタゴノ象ノ子』という2冊の翻訳絵本の出版の背景がうかがえる。先述の通り、光吉は筑摩書房の2冊の絵本の前文に、作家作品の詳細な紹介文を載せているが、「翻訳者の反省」からは、筑摩書房の2冊が恣意的な選書に基づいてではなく、海外の出版状況やその絵本の本国での評価などを入念に調べたうえで、選ばれたことがわかる。さらに、前文に書かれた作家作品の紹介も、作家や作品の情報を集め、分類カードで整理した調査をもとに書かれていることが明らかになった。

「翻訳者の反省」で光吉自身も述べているように、この時期の児童書は恣意的に選ばれ、しかも体系的に訳されていたわけではなかった。その無秩序によって、訳されるべきものが訳されず、つまり日本の子どもに読まれるにふさわしいものが読まれていない現状があった。この評論から、光吉は絵本翻訳の際に、多くの情報を得たうえで、訳そうとしている作品を歴史や文化に照らし合わせ、「今、日本の子どもたちに何を手渡すべきなのか」という視点を持ちながら、吟味して選んでいたのだ。さらに、その児童書を出版することが、日本の児童書出版界でどのような意味を持つのか、そこまでを考慮した上で出版をおこなっていたことが文面から見て取れる。筑摩書房2冊の出版は戦争の影響で中断したが、十数年の時を経て〈岩波の子どもの本〉シリーズで翻訳されることになる¹¹。

光吉がこの評論において、異文化理解の視点を持ち得ていること、体系的で秩序ある児童書翻訳を見据えていることは評価に値する。ただし、それらの指摘が戦争遂行を押し進める国策との文脈のなかで語られていることに、問題が残る。光吉は戦時期の児童文化統制側の立場からの発言に終始している。『少国民文化』にはプロパガンダという役割がはじめから与えられていたので、渦中にいた光吉がこのような発言をすることも当然と言える。しかし戦時期を総括する視点から、戦争に加担する執筆にどのような意味があったかを検討することにも、何らかの意味はあるだろう。

大東亜共栄圏の建設とは、言い換えれば日本の植民地政策の遂行である。植民地政策の子どもたちに理解させ、異文化を支配する素地をつくるために、児童書翻訳を一つの方法論として打ち出したのである。文筆家の戦争責任を問われる評論であることは、間違いない。『小国民文化』のなかで、光吉の論調はまだ戦争加担色は薄い方ではある。

(2) 「絵本の世界」『生活美術』(1943)

① 「絵本の世界」と雑誌『生活美術』

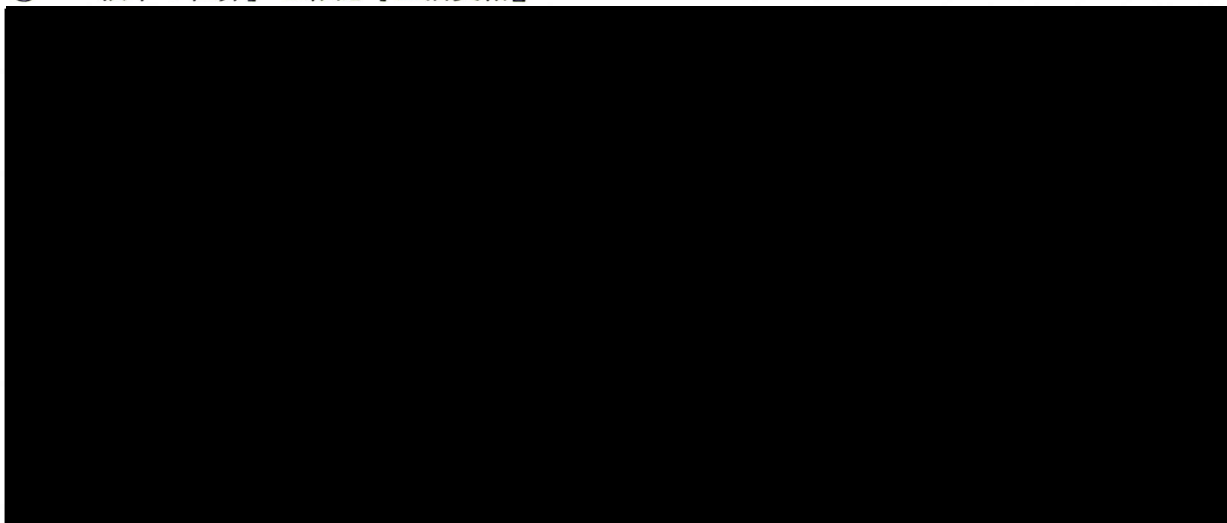


図 13 『生活美術』表紙(左) と カラー口絵(右)

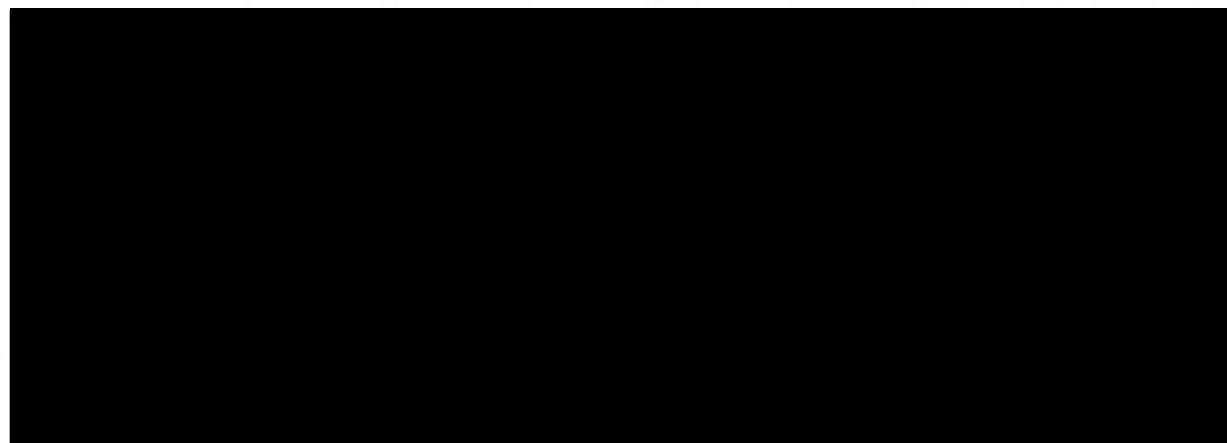


図 14 「世界の絵本」の図版

「絵本の世界」『生活美術』第3巻第9号 絵本特集 アトリエ社 1943年9月

この時期の絵本研究においては、初めての幼児絵本研究書といえる牛島義友・矢部信一共著『絵本の研究』(共同公社出版部 1943年4月)が出されている。同年9月『生活美術』で「絵本特集」(図13・図14)という特集が生まれ、絵本制作に直接関わる人々が、画家、研究者、翻訳家など、それぞれの立場から見解を述べている。『生活美術』の「絵本特集」の目次を挙げておく。

— 『生活美術』「絵本特集」目次

造形美術による児童教育の問題 青木誠四郎
絵本の教育性 依田新
絵本の心理と社会性 牛島義友
童画家教育の問題 三輪和敏
三代絵本小観 菅忠道
単行本式絵本について 波多野完治
良い絵本と悪い絵本 松葉重庸
絵本の材料と印刷技術 北川民次
絵本とことば 与田準一
絵本の類型について 竹田俊雄
絵本をつくる人々 高森栄次
絵本を育てる座談会 山田・巽聖歌・山下・中尾
グラフ 日本の絵本……8頁
 世界の絵本……8頁
絵本の世界 光吉夏弥

表紙の目次には載っていないが、光吉の評論のあとに、柴田隆二「教科書の挿絵—独逸の国民学校教科書では挿絵を何ふ扱つてゐるか」、ヴォルフ・ドゥリアン「最初の絵本—それが子供の生涯につき纏ふ—」、正樹克巳「絵本の今と昔」、ジャン・セルズ「フランス児童絵本の復興」、松原公平「絵本参考文献」の小論がある。

② 光吉蔵書の公開

評論「絵本の世界」は、児童文化統制下の『少国民文化』時代と同時期の仕事でありながら、光吉が絵本について自由闊達に語り、まさしく本領を発揮した評論である。以下に「絵本の世界」の内容を検討する。

光吉はこの特集の口絵「世界の絵本」において鮮明なカラー図版、モノクロ図版（図14）を使用して、諸外国の美しくすぐれた絵本を具体的に紹介した。図版はすべて光吉の蔵書を提供していると考えられる。戦時期にこれほど多種多様の海外絵本を持っているのは、光吉だけであった。〈岩波の子どもの本〉編集で共に仕事をした石井桃子は、当時の光吉の蔵書について以下のように証言している¹²。

戦後の状態って、いまお話してもうそみたいですが、あの頃、私たちは外国の本を買うことも、選ぶこともできない状態にあったわけなんです。ところが、光吉さんはたたくさん外国の絵本など持っていらしたの。目の利く方で、戦争で引き上げていった外国の人たちのおいていった本など、御自宅いっぱい集めていらしたんです。それで私が岩波の重役さんに、光吉さんの本をお借りしなくちゃ、「子どもの本」、出せませんよ、って言ったんです。ほんとうに当時、資料になる本を持って人、他にだれもいないんですよ。

戦後の占領期がおわっている1953年においてすら、このような状況であったということは、戦中においては海外絵本の入手は困難を極めていたといえる。光吉が戦火の激し

くなるなかで、キリスト教宣教師などの外国人が引き揚げていく際に、その家庭にあった絵本を手に入れていたことは、鳥越信（同じく〈岩波の子どもの本〉編集者）も本人から直接話を聞いている。このことから、戦争の最中「絵本の世界」に図版入りで紹介された種々の海外絵本は、光吉の蔵書であったことが推測できる。

その資料を活かして、この特集の巻末にある「絵本参考文献」の「海外における絵本研究書」項の執筆にも協力した。『生活美術』「絵本参考文献」の最後には、「註、絵本に関する参考文献はまことに少ない。単行本としても纏まつたものは僅少である。右に挙げた諸論文も、早急に手近かの資料から拾ひ上げたもので尚多少の洩れはあると思はれるが一先づ何等かの参考として発表して見た次第である。尚外国関係の絵本研究書の蒐録に関しては光吉氏の御協力を得た。」とある。この「絵本参考文献」にリストアップされた文献は、漫画や童画についての文献も含まれているため、純粹に絵本について論じた文献は少なく、一般には絵本観が成立していないことや、絵本の研究など程遠い状況であったことが分かる。当時の状況から、光吉が国内外の絵本の現物と研究文献を持ち合わせていたことが、どれほど稀有なことか明らかであろう。

③ 絵本出版の「一回生産性」の払拭

「絵本の世界」の内容を詳細にたどり、光吉の絵本観を以下に検討する。光吉はこの文献において、絵本の芸術性と表現媒体としての可能性を論じている。この評論からは、光吉が戦中において独自の絵本観を確立していることがうかがえる。光吉は、以下のように初版で消えてしまう価値しか持たない絵本が圧倒的に多いことに触れ、優れた絵本でさえが版を重ねて後世に残らないことを嘆く。「たくさんの絵本が、紅葉した木の葉のやうに氾濫し、それがまたどこへともなく、風に吹かれる木の葉のやうに散つてゆく」と、日本の絵本出版をはかなく散っていく秋の落葉に重ね、消耗品としての価値しか見出されていない絵本の宿命をたとえている。

つづいて、絵本出版の壮大な浪費が、結局は巨大な「無駄な消費」を生み出す悪循環を生んでいると指摘する。この「一回生産性」を脱して、「恒久性を目標とする」よう軌道修正すべきことを説いている。

年々出版される絵本の数と量は、恐らく何百種何百万部をもつて数へられるであらうが、そのうち版を重ねてあとに残るものは、誠に微々たるもので、たいていの絵本が一度きりの登場で永遠に姿を消してしまふのが常である。もちろん、一度で消えてしまふ価値しかもたない絵本がべらぼうに多いことは事実であるが、常にあつてもいい優れた絵本でさえが同じやうに消へてしまふのである。（中略）かうして絵本出版の壮大な浪費は一向に是正されるところがないのであるが、その一番大きな原因は絵本の一回生産性にあると思ふ。

この光吉の発言の背景事情としては、戦時期、大量に低俗廉価な絵本が出回っていたことが挙げられる。

1938年に発表された内務省の指示要綱による童読み物の統制において、いちばんの標的になったのも、実はこの時期に氾濫していた「赤本絵本」と呼ばれる絵本であった。多くはマンガであった。そのため、マンガと同様、絵本というと低俗野卑というイメージ

ジが強かった。内務省の児童文化統制により、多少その傾向も修正された。しかしこの統制によって絵本出版は、光吉がこの評論で論じている芸術性の高いものというよりは、軍事的、しつつけ的、科学知識的な方向に強く傾いていったのである。

④ 絵本の質の向上

評論では光吉はつづけて、「恒久性のある国民絵本群が打ち建てられるためには、現在の絵本の水準がいま一段高められ、その世界が一層広く豊かにされなければならないことは、いふまでもないことである。」と絵本の質を向上させるべきであると指摘する。

「いつもいはれるとほり、日本の絵本が文化財としての新しい出発をもつたのは、昭和十三年の内務省の絵本浄化運動によつてであり、それ以来、絵本が良くなつてきたことはたしかな事実である。」と述べ、1938年の内務省の「児童読物改善ニ関スル内務省指示要綱」を評価する。しかしその一方で、「絵本がよくなつたといふことは、しばしば賛美をもつてさへ語られる言葉である。しかし私はそれを、かつての赤本時代との対比においてしか受け取れないのである。いまの水準で満足してよいのならばことは簡単だが、絵本のもつてゐる世界はまだまだ広く、もつと高い難しいものだからである」と、さらなる絵本の質の向上の実現に希望を抱いている。光吉が、芸術としての絵本を、厳しく追及する姿勢が見られる。

光吉は、絵本の世界が広く、高い難しいものだとする根拠を次のように説明する。この指摘は、現代にも通じる問題である。

一つの例が、日本では、絵本は八九歳までのものとされ、それ以上の年齢の鑑賞にたへうるものがない。しかし絵本の包括しうる読者の範囲は、こんな狭いものではない筈であるし、すぐれた童話がおとなにもまた興味あるものであるやうに、絵本も同様に広い年齢層に訴へうりものでなければならない。またそれだけの資質の幅をもつてこそ、絵本ははじめて優秀でありうるのだが、この段階に達するまでは、まだ長い途が、日本の本のまへにあることは、誰もが同意されることであらう。

⑤ 絵本表現におけるコンティニューイテイ

光吉は、絵本表現におけるページをめくって物語が展開する連続性を「コンティニューイテイ」という言葉であらわしている。上記に示した目次にある『生活美術』の評論にも、当時の絵本に関する文献のなかにも、絵本表現の連続性を指摘するものは皆無である。ましてや「コンティニューイテイ」という言葉も見当たらない。

本評論では、この「コンティニューイテイ」という言葉は、絵本作りの一種の安易な型があることを指摘する文脈のなかで現れる。

B5版・縦の絵本がたいてい見開き単位の見開き構成をとり、十面前後の見開き頁に、船の絵本なら色々なかたちの船の一枚絵を十枚、海の絵本なら海に関して考へられる極く常識的な場面の絵を十枚、ぽん、ぽんと投げこんで、それに簡単な文がついてゐる、それだけで終つてゐるあの手の編集に、一つの安易な型を感じるのは、私の見誤りであらうか。この手の絵本には、見るものに欠きえない編集要件であるコンティニ